

夏の夜の現実

あすか こうじ

1. プロローグ

1. 第一話 映画館の不思議

1. 第二話 消えた被害者

1. 第三話 開けてはいけない襖

1. エピローグ

1. あとがき

夏の夜の現実

あすか ころもじ





プロローグ

「えーっ、雨が降ってるよ！天気予報では言ってなかったのに！」

ドアを開けた島川くんが大きな声をあげた。

「げっ、俺、傘持ってねえよ！」

倉岡くんが叫ぶのを聞いて、あ、僕もだ...と呟いたのが、僕こと、桐原辰哉。

「雨が上がってから、帰りゃいいじゃないか。」

落ち着いた声でそう言ったのが、この部屋の住人で、今夜、僕ら悪友の訪問を快く迎えてくれた黒神くんだ。

「雑魚寝でよけりゃ、最悪、泊まっていても構わないぜ。」

黒神くんの言葉が決定打となって、帰りかけた三人が再び、黒神くんの部屋に戻った。夏休みに入って、帰省してしまった友人が多い中、実家に戻らない下宿生ばかりが缶ビールやおつまみを持ち寄って、大いに盛り上がっていたのだ。

再び、部屋の中に戻ったはよかったが、今さら、元のテンションに戻れるはずもなく、何となく白けた感じになってしまった。誰かが何かを言っても、話がつながらない。そのうち、倉岡くんがこんなことを言い出した。

「せっかく蒸し暑い夏の夜なんだし、百物語でもやろうか？」

「百物語？詳しいことはよく知らないが、怪談を百個、話すというアレか？それはさすがに徹夜仕事になるんじゃないか？」

反対しようと思ったが、僕が口を開く前に、黒神くんが口を開いた。

「一人平均、二十五話ずつ、怪談を話さなきゃいけない計算になるぜ。みんな、そんなに知ってるのか？少なくとも、俺はそんなには思いつかないぞ。」

「いや、時間つぶしだから、そんなにたくさん語らなくていいよ。一人、一話ずつで一周して、まだ雨が降ってたら、また別の暇つぶしを考えたらいい、ぐらいいい感じで。」と倉岡くん。

「あいにく、俺は非合理的な話は信じない。だから、怪談のたぐいは話すネタとしては持っていない。すまないが、聞き役に徹するよ。」

黒神くんは生あくびを噛み殺しながら、そう言った。本気で、怪談話には興味がないようだ。それでも、我々悪友たちは本来のこの部屋の住人の意向を無視して車座になった。そして一

「じゃあ、言い出しっぺの俺から、始めるからな。」

倉岡君がまず、口を開いた。

第一話 映画館の不思議

「これは、こないだ実家に帰ったときに、俺が姉貴から聞いた話なんだが、怖いというよりは、ちょっと不思議な話なんだ。

姉貴には、最近つきあい始めた彼氏がいるんだが、その彼氏と二人でなんとかいう映画を観に行ったときの話だ。ほら、なんて言ったっけ、深夜ドラマが原作の、推理ものみたいなやつ。...そうそう、それぞれ。

まあ、映画のタイトルはどうだっていいんだけど（ここで、どうでもええんかい！と島川くんの突っ込みあり）、映画館に入ったら、ものすごく混んでいて、びっくりしたらしい。全席指定の映画館で、彼氏が前売り券を買ってしてくれたんだけど、かなり後ろの席で、しかも左端に近い位置だったから、ずいぶんと文句を言ってたんだけど、実際に入ってみて、なるほど、こりゃしょうがないなあ、って納得したらしい。なんでも、二人分並んで空いていたのが一ヶ所だけだったから、チケットと席についてる番号を突き合わせなくても、すぐに場所が分かったんだってよ。そんなんで、大いに彼のことは見直したんだそうだ。この話を聞かされたとき、たっぴり一時間は姉貴のノロケ話も聞かされたんだ。（いや、それこそどうでもいいだろう、と僕。）まあ、そうなんだけどな。

で、ここからが本題なんだ。映画が始まる少し前に、同じ列の右の方に座っていた女性が立って、姉貴の前を通過して、どこかに行った...ちょっとしたら、誰か男の人と一緒に戻ってきた。そして、二人が空いた席に座ったと言うんだ。

ま、それだけなんだけど、これってちょっと変じゃないか？

それだけ話すと、倉岡くんは口をつぐんで、一同を見回した。

一瞬、座が静かになった。ん？席が全部埋まった列から、一人だけ立ち去ったのなら、二人が戻ったときに、空いている席は一つしかないはず。二人が座れるはずはない。確かに変な話だが...

最初に口を開いたのは島川くんだった。

「そりゃ、言っちゃなんだけど、君のお姉さんが勘違いしてたんだろう。その列は元々、もう一人分、席が空いてたんだよ。」

「それは、この話を聞いた誰もが、最初に考えることだろう。俺も、姉貴にそう言ったんだ。だけど、絶対にそんなことはないと言うんだ。」

一同、ホントかよ？という顔をしていたのだろう、さらに倉岡くんは言葉を継いだ。

「姉貴だけが言うんだったら、俺も正直、あやしいと思うんだけど、一緒に行った彼氏もそう言うんだ。絶対、間違いはないってよ。姉貴はともかく、彼氏の方は結構しっかりしてるから、間違いはないと思うぜ。」

倉岡くんとしてはこの信憑性を主張したいのだろうが、お姉さんが聞いたら怒り出しそうなことを言う。いや、彼氏が褒められたら嬉しいのかな？その辺、どうなんだろう？

「まあ、今の話に間違いがないなら、確かに不思議なことだな。」

島川くんがぼそっと言ったとき、黒神くんが芯から不思議そうに言った。

「で、今の話の、何が不思議なんだよ？」

え？何言ってるの？この人…。

「倉岡くんが怖いというよりは不思議な話だっていうから、いつ、不思議なことが起きるんだろうと思って、楽しみに聞いてたんだけど、最後まで聞いても、不思議なことがでてこないからさ。どうしたのかと思って。」

「え？全部の席が埋まった列から、一人だけが出て、後に二人座ったら、不思議だと思わないか？」

「だから、二人が立ったんだろうよ。」

黒神くんはこともなげに言う。

「席を立った女性が君のお姉さんの前を横切ったときに、誰かもう一人、並んだ席の反対側から出ていったんだろうよ。映画館の席って、椅子が動かさないし、前との間もそんなに広くないから、前を人が横切るときに、ちょっと詰めなきゃいけないだろ？前を通っている人に気をとられて、反対側から人が出ていっても気がつかなかったんだろう。何も不思議はないよ。」

「でも、そんな偶然ってあるか…？」

「偶然？二人が同時に、反対側から出ていったのが、か？いや、偶然じゃないだろう。」

僕たちは黒神くんの顔をじっと見つめた。どういうことだ？偶然じゃない？

「席を立った女性が、もう一人、誰か男性を連れて戻ってきたんだろう？その人と隣同士で座るために、元々隣にいた人に、席を替わってもらったんだろう。」

「要するに、こういうことだ。君のお姉さんたちは、早めにチケットを押さえたから、二人で並んで座ることができた。だけど、二人で観に来て、離ればなれの席しか残ってなかった人もいた。仕方なく離れた席に座ったけど、二人で一緒に映画を観たいから、隣の人に席を替わってもらえないかと交渉したんだろう。幸い、隣の人が席を譲ってくれたんで、その女性は連れの男性を呼びに行った。席を譲った人は、別にどこで観てもいいと思ったんだろう、近くの空いた席に移った。そのときに、反対側から出ていった、それだけのことだろう。」

なるほど、そう考えれば辻つまが合うだろう。特に不自然なところもないように思える。

「そうか、なるほど。この話を聞いてからずっと、胸に何かがつかえてるような気分だったけど、これでスッキリしたよ。」

倉岡くんはそう言って立ち上がると、窓から外を見た。

「雨はまだ降ってるけど、百物語はどうする？まだ続けるかい？」

現金なものだ。こいつ、今の話の真相が分からなかったから、みんなに意見を聞いたかっただけだろう。百物語とか、関係ないじゃん。と思ったら、島川くんが切り出した。

「僕も聞いてほしい話があるんだ。さっきの話よりは、怪談に近いんじゃないかと思うけど、

僕自身が実際に体験した話なんだ。」

倉岡くんも座った。僕らは話を聞く体勢に入った。

第二話 消えた被害者

一しかも、これを体験したのはごく最近のことなんだ。夏休みに入ってすぐ、実家に帰ったんだ。二泊しただけだけどね。弟が剣道やっててね、地元の大会に出るっていうんで応援に行ってきたんだ。

まあ、うちの弟は予想以上にがんばって、ベスト8まで進んだから（ここで一同より、おおーっと感嘆の声）、帰りは外食したりして、かなり遅くなったんだ。N市の体育館が会場だったんだけど、そこから帰ってくる途中、親父のワンボックスカーで山道を走っていたときのできごとなんだ。

右側がすぐに崖で、左側が切り立った斜面になっている、細い道だった。どれぐらいって？車2台がすれ違うのはかなり難しいぐらいの道幅だ。しかも、結構、曲がりくねっている感じなんだ。だから、親父もかなり神経をつかって運転していたと思う。狸坂って言って、地元でも有名な難所だったからね。

助手席にはお袋が座っていた。後ろの席に僕と弟が座っていた。とはいえ、車が走り出してすぐに弟はうとうとし始めた。疲れてたんだろうね（なんせベスト8だから、と倉岡くんの声）。しょうがないから、僕は見るともなく、窓から外を見ていた。崖の下にはところどころ灯りが見えて、なかなかいい雰囲気だった。久しぶりに剣道の試合とか見て神経が昂ぶっていたのか、全然眠いとは思わなかった。

だけど、大きなカーブを曲がる...というか、回り込んでいったとき、突然、親父が急ブレーキを踏んだ。弟もびっくりして、目を覚ました。みんな、前につんのめりそうになったからね。僕はまだ起きてたから咄嗟に前のシートに手をついてよかったけど、寝ていた弟は助手席の椅子にぶつかって驚いていた。親父が振り向いて、大丈夫か？と言った。僕はうなずいたが、弟はなんだよ、びっくりするじゃん、とかなんとか文句を言った。

親父は、慌ててシートベルトを外しながら、それだけしゃべれりゃ大丈夫だろ、とか言った。当たった？とお袋が震える声で尋ねるのが聞こえた。いや、大丈夫のはず、と親父が答えて、ドアを開けて外に出た。

どうしたの？とお袋に訊いてみたら、人に当たっちゃったかも、突然、出てきて前を横切っていたの、という返事だった。声が震えていた。驚いて、僕も車を降りた。

降りてみたが、親父は眼につかなかった。あれっ？と思って見回すと、車の後ろで親父はじっと立っていた。僕は、大丈夫だった？と訊いたんだけど、親父はわからない、とぶっきらぼうに答えてただけだった。分からない、というのも妙な話だろ？誰かいたんなら、その人に話を聞けばいいんだから。何言ってんだろう、と思いながら、親父の方に近寄っていったんだけど、親父ときたら、僕の方を見もせず、斜め後ろの道路の端のあたりをじっと見ているんだ。そのことに気づいて、よく見てみると、きれいな花束が置いてあった。夜目にも白い、菊の花だ。親父を見

ると、魅入られたようにじっとその花束を見つめているんだ。

なんだか気味が悪くてね、何見てるんだよ、とわざと大きな声で言ってみた。喉はカラカラに渴いていた。そうしたら、親父は、ハッとしたように僕を見た。そのとき、初めて僕の存在に気がついたような感じでさ。もう一度、何見てるんだよ、と言ったら、黙ってその花束を指さしたんだ。

何だよ、あれ、とか言ったんだと思う。正直なところ、それが何を意味しているかは僕にも分かっていた。分かっていたけど、認めたくなくて、わざとそう言ったのかもしれない。

親父は、つぶやくように、花束だよ、見りゃわかるだろ、とか言ったんだ。それから、カーブを曲がってきたところで、目の前に人が飛び出してきたんだ、慌てて急ブレーキを踏んだけど、当たったような感触はなかった、でも車を降りてきたら、誰も見当たらないんだ、それで、あそこにあれがあったんだ、と言うんだよ。

今さら言うまでもないけど、見通しの悪い道路の端に花束が置いてあったら、そこは交通事故、それも死亡事故が起こった現場だということだろう。親父はそのことと、突然あらわれ、またどこへとも知れず消えていった人影を結びつけて考えているのだろう、車の前に飛び出てきたのは、そう遠くない過去にここで非業の死を遂げた誰かの霊だったんだと考えているのだろうということは想像に難くなかった。そんなばかな、とは僕も思った。だけど、道路の片側はガードレールがついてるとはいえ、崖になっている。隠れるようなところはどこにもない。無理に外側に出たら、落っこちて、大ケガをするのがオチだ。ちなみに、花束が置いてあったのも、そっち側だった。逆の方は切り立った斜面で、目の前にコンクリートの壁が立ちはだかっているような格好だった。一応、上の方は土になっていて樹も生えているが、そこまでは3メートル以上はありそうだった。僕らに気づかれずに、そこを登っていったとは思えない。もちろん、花束を見に行ったときに見たけど、崖の斜面にへばりついている人もいなかった。

車の前のところを見てみたが、何かにぶつかったような跡はなかった。だから、実体のある人にぶつかったわけではないことは確実だ。

周りを調べてみたけど、結局、何も分からないまま、二人とも車に戻った。人とぶつかりそうになったものの、実際に死体が転がっているわけでもなし、怪我人がいるでもなし、車の前に出てきた人影は、車とぶつかることなく、そのまま消えてしまったと考えるより他ないという結論に達したわけだ。一だけど、実際にそんなことが可能なのだろうか？それが、ずっと心の隅に引っかかっている疑問だ。僕も、まさかそれが幽霊だったとは思わないが...なんとも不思議で気味の悪い話だろう？

「うーん、率直に言って、担がれたんじゃないの？」

倉岡くんがぶっきらぼうに言った。

「担がれた？」

島川くんが不審げに聞き返した。

「ああ、それ、お父さんのいたずらみたいなものじゃないの？」

島川くんは少しカチンときたような表情を一瞬見せたが、落ち着いた声で答えた。

「いや、うちの親父はそういうことをするタイプじゃない。それに、結構、夜も遅くなってきているのに、そんなことをして、無駄に時間をとったとは思えない。」

倉岡くんはちょっとすねたような感じで黙ってしまった。島川くんは意図的に彼から目を逸らしているようだ。

「車から降りて外を探したのは、君とお父さんだけだったのかい？お母さんと弟さんはずっと車の中だったの？」

僕はちょっと訊いてみた。特に深い意味はないが、ちょっと陰悪なムードになりそうだったので、何か別の質問を試してみようと思ったのだ。

「うん。車に戻ったとき、弟はおでこを押さえていた。助手席の背もたれにぶつけちゃったからね。かなり痛そうだった。車に戻ったときに、二人に窓の外に人影はなかったか訊いてみたが、親父と僕以外には誰も見かけなかったと言ってたな。…何か、考えがあるのかい？」

いや、特に考えがあるわけじゃないんだけど…と口籠もってしまったが、ふとある仮説を思いついた。

「下、だよ。」

僕は思わず声を張っていた。これは結構、いけるんじゃないか。

みんな、きょとんとしている。意外だろうが、これが真相だという自信があった。ちょっともったいぶりながら、僕は続きを話した。

「車の下だよ、車の下。謎の人物はぶつかりそうになったとき、地面に倒れ込んで、車の下にもぐった格好になった。そのまま、車が走り去るまでそのまま隠れていた。もしくは、君とお父さんの死角に入るように、車そのものを盾にしながら回り込んで、逃げ出したんだ。」

「車の下に、人が隠られるほどのスペースがあるかな？猫がいるのを見かけたことはあるけどねえ。」

倉岡くんが嫌みっちらしく言った。

「うーん、結局、誰も見当たらずで、再度、車が走り出した後、僕はしばらく後ろを見ていたんだが、人影はなかったんだ。それから、車の影に隠れて回り込む、というのは無理だと思う。二人がどっちを見るか分からないから、どこに隠れてどっちに逃げるかの判断が相当、難しいと思うんだ。」

言われてみればその通りだが、僕も引っ込みがつかなくなった。

「かなり長い距離を、車体の底面にしがみついていた、というのはどうだ？」

「ええっと、君はこう言いたいわけか？謎の人物の正体はスパイダーマンだった、と。」
そこまで言われると、さすがにぐうの音も出ない。

「いっそ、そこには元々誰もいなかった、というのはどうだ？」と倉岡くん。

「どういうことだよ？」

「実は、人が歩いていたのではなく、ホログラム映像だったのだよ。」

「そんなこと、実際にできるのかい？」とあきれ顔の島川くん。

「試作品の実験をしていたというのはどうだろう？」

「もしそうなら、通行規制をすとかして、安全を確保してからやるだろうな…。というか、そもそも、実験室とかじゃなくて、路上でそんな実験をする理由は何だい？」

「まあ、これが正解だとは思ってないさ。こうして検証してみることで、その人物が確かにそのとき、その場所にいたことがはっきりしたじゃないか。」

屁理屈である。さすがに、島川くんがイラッとした表情を見せたので、僕は話題を変えようと思って、言ってみた。

「そもそも、その人はなぜ夜遅く、そんなところを歩いてたんだらうな。」

すると、黒神くんが、

「どうやって姿をくらましたかはともかく、何のために夜遅くそこにいたかは、大方、見当がつくだろう。」

その他の全員が、えっ？という顔をして、一斉に黒神くんを見た。

「なんだ、不思議そうな顔をするなよ。さっき、島川くんが、きれいな花が置いてあったと言ったじゃないか。このクソ暑いのに、路上に置かれた花束がそんなに長持ちするとは思えない。おそらく、その人物は、花束を置きに来たんだらう。そして、帰ろうとして、自動車に轢かれかけた。」

「だったら、昼間に来たらいいじゃないか。なんでそんな時間に…。」

「人目を避けたい理由があったんだらう。おそらく、その人は交通事故死の犯人、というか、加害者ではないかと思う。罪悪感から、被害者の供養のために花束を持っていきかけたが、捕まりたくはないから、人目を避けて夜中に行ったんだ。絶対にそうだとは言い切れないだろうが、無理のない解釈ではあるだろう。」

なるほどね、と島川くん。

「じゃあ、どうやって姿を消したんだらう。まさか、車に撥ね飛ばされて、崖の下に落ちたとか言うんじゃないだらうね。」

「この話のキモはそこじゃないと思う。どうやって姿を消したかではなく、どうやってそこに来たか、だらう。そこから考えていくと、真相らしきものが見えてくるんじゃないかと思う。」

「どういうことだ？」

「ん？道路の状況を聞くかぎり、その人物は徒歩で来たとは考えにくいように思える。もし、車かバイクなんかで来たんなら、すぐ近くにそれらを置いて、花束を置きにいったはずだらう。だけど、島川くんの話では、近くに車とかは見当たらなかったんじゃないかと思うんだ。」

「そうだ。そこは考えてなかったけど、無人のバイクとか自動車が置いてあれば、気づかないはずはないよ。」

黒神くんは、そうか、と言った。

「やっぱりな。停まっている車かバイクを見たら、印象に残るだらうから、話に出てくるだろうと思っていた。けどなかったということは、カーブをさらに回り込んだ先とか、君たち家族の乗っていた車から見えないところに車かバイクが停めてあって、それで走り去ったか、どっち

かだろう。だけど、どう考えても、夜の山道を、花束を手を持って歩いてきたと考えるのは、少々、無理があるだろうな。事故当時は、車かバイクに乗ってきたんだろうし、今回も、そういうたぐいのものに乗ってきたと考えるのが妥当だろう。ま、俺はバイクだろうと思うけどな。その方が目立たないし、機動力がある。」

「おい、ちょっと待てよ。」と倉岡くんが声をあげた。

「その道路を歩くのが不自然だというのなら、そもそも最初の事故はどうやって起きたんだよ？」

「最初の事故？」

「そう。謎の人物が加害者となったと想定している事故のことだよ。その道を歩いている人をはねたというのなら、やはり不自然だろ。」

「被害者が歩いていたとはかぎらない。バイクと車の事故とかかもしれない。俺は勝手に、カーブを曲がる時にスピードが出過ぎていてふくらんでしまった対向車同士がぶつかったんじゃないかと思ってるがね。外側の崖に近いところに花束を置いたのは、そのあたりでぶつかったからだろうと推測しているんだ。」

ふうん、と言ったきり、倉岡くんは黙ってしまった。よしよし、ぐうの音も出ないというやつだね。さっきの僕と一緒にだね。

「さて、話を本筋に戻そう。謎の人物は、バイクか車でやって来た。彼、あるいは彼女の心理としては、目的の場所のすぐ近くにそれを置いておくのは抵抗があっただろう。少し離れたところに、それを停めておいた。花束を置いた後、彼、あるいは彼女の立場としては、自分が乗ってきた乗り物のところに大急ぎで戻ったんだろうな。ゆっくり、安全を確かめてから道路を渡っていれば、車に轢かれそうになることもなかったらうけど。」

「そうだ、それからその人はどうした？どうやって、姿を消した？」

「いや、どうもしないだろうよ。そのまま、乗り物のあるところまで走って、それに乗って逃げただけさ。」

これには一同、ぽかんと口を開けたままだ。一瞬の間があって、島川くんが問いかけた。

「なんだって？どういうことだよ？どこかに隠れたとかじゃなくてか？」

幾分、怒気を含んだような口調になったのも分かる気がする。

「そういうことだ。もう少し詳しく言うなら、角度の問題だ。君はおそらく、前を横切ったという言葉聞いて、人と車がほぼ直角に交わるイメージを持っただろうが、実際のところはずっと浅い角度で交わっていたはずだ。つまり、実際には君たちが乗っていた車から見て、その人物が斜め前に逃げていく感じだな。」

「その人物は人に見られたくない。花を置いた後、大急ぎで乗ってきたもののところに戻った。とすればだ、おそらくはほぼ一直線にそこに向かった。おそらくは全力疾走で。道は大きなカーブになっていて、それは、君たちから見えない位置に置かれていた。お父さんは急ブレーキが間にあう程度には手前で、ブレーキを踏んだ。車はそのまま直進してから停まった。つまり、向きとしては、かなりカーブの外側に向いた状態で停車した。逆に、その人物はカーブの内側に回

り込むように移動していた。おそらく、降りた直後の位置からは、君たちが乗っていたというワンボックスカーが視界を遮っていた感じだったんじゃないかな。そして、君のお父さんは、車を降りた後、辺りを見回して、路傍の花束に気がついた。夜目にも白い菊の花だ。車の後ろを向く感じで、相手から遠ざかる方向に動く形になった。いわば、自らすすんで、そのワンボックスカーの死角になるように動いてやったようなもんだ。君は車を降りて、ちょっと周りを見て、すぐにお父さんに気がついた。だから、同じように、逃げる相手を死角に入れてやるよう動いた。二人が話をしている頃には、すでに乗ってきたものに乗って、かなり遠くまで走り去っていたんだろう。」

何か言いたそうな顔の島川くんに、黒神くんが言った。

「しょせん、世の中こんなもんだ。」

第三話 開けてはいけない襖

じゃあ、トリはお前だ、と倉岡くんにならまれた。島川くんも期待に満ちた眼でこっちを見ている。唯一、黒神くんがまたかよ、とでも言いたそうな表情で見ているのが救いだ。その表情に後押しされるように、僕は思い切って、言ってみた。

「そろそろ帰ろうよ。黒神くんが悪いし...。」

そして、助けてくれ、という思いを込めて、黒神くんの方をチラ見した。...のだが。

「いや、遠慮はいらんよ。まだ雨も降ってるし、泊まってもかまわないぜ。」

え？それは冷たいだろ、黒神くん。君だけが頼りだと思ったのに...。仕方ない。僕が体験した、いくらか怪談めいた話といえば、一つだけしか思いつかない。ただ、この話はなぜか思い出したくないのだ。怖いから、というだけではない、何かを感じるのだ。それが何かと言われると、自分でもうまく説明できないのだが...

とはいえ、メンバーからせつつかれて、仕方なく僕は語り始めた。

「うちが母子家庭だったということは、みんな知ってるよね？（無言のうなずき）これから話すのは、僕が小学校四年生の時のことだ。」

「僕は風邪をひいたんだ。確か、水曜日の夕方ぐらいから症状が出始めて、夜に近所の医者に連れていってもらって、三日分の薬をもらって帰ってきた。翌朝、熱を測ったら、七度二分だった。で、学校を休むことになって、母が電話してくれたんだ。...でも、その電話で母が、四十度以上も熱がある、と相当、深刻そうに言っていて、なんだかずる休みするような気分だったことを憶えている。」

「一応、朝ご飯を食べた後、風邪薬を飲んだ。おかゆをつくって置いてあるから、お昼はそれを食べるように、それから、何かあったらすぐに電話するようにと強く言って、母はいつものように仕事に出かけた。僕は、正直、普通のご飯とおかずの方がよかったけどな...。それはさておき、僕はテレビを見ていたが、その時間帯は子ども向きの番組はやってないし、退屈して、すぐに切ってしまった。体もだるいし、横になったら、少しして眠ってしまった。風邪薬の効果もあったのかもしれない。それで、目が醒めたら、昼過ぎだった。台所に行ったら、母の言葉どおり、おかゆと二回分の風邪薬が置いてあった。なかば糊みたいになった、かなり柔らかいおかゆを食べて、風邪薬を飲んでまた横になった。そのまま、すぐにうとうとし始めた。」

大して面白くもない話を、皆、神妙な顔をして聞いている。なんだか妙な気分だ。

「でも、押入の中でゴトツ、と音がして、僕は目が醒めたんだ。」

押入？と聞き返したのは、島川くんだ。

「そう、押入。その頃、僕と母は、六畳一間に台所とも呼べないような狭い台所とトイレだけのアパートに住んでいたんだ。風呂は近所の銭湯に行っていた。僕が寝ていたのはその六畳間で

、そこには押入があった。」

ふうん、と島川くんは納得したようだ。

「押入の中は上下二段になっていて、上段に布団類、下段に衣類の入った衣装ケースが三つと、おもちゃ箱があったくらいだった。そんな、ゴトツとかいう音のするようなものは何もなかったんだ。」

「その、おもちゃ箱に入っていたものが、何か、崩れたとかしたんじゃない？」と倉岡くん。

「いや、そこに入ってたのは、人形とかそんなものだったし、そういう音ではなかったと思うけどな。そうだ、動かすたびに鈴の音がしてたから、絶対に違うよ。断言できる。で、...そうだな、感じとしては、奥の壁に何か、固いものがぶつかったような、にぶい音だった。それに、押入の上段あたりから聞こえたように思う。」

そう言っても、倉岡くんはまだ疑わしそうな顔つきだったが、僕はかまわず続きを話した。

「僕は驚いて、しばらく、押入のふすまをじっと見つめていた。そしたら、今度はうめき声のようなものがかすかに聞こえたんだ。」

気味悪いな、と倉岡くん。島川くんは、押入の中に誰かいたんだろう、とある意味、至極当然の反応を示してくれた。だが、僕は力説する。

「中に、って誰が？いつの間に？何の目的で？まだこれから話すところだったけど、母が帰ってきたとき、僕が中から鍵を開けた。つまり、確かに鍵をかけて出かけたってことさ。母が出かけた後に、忍び込んだとは思えない。さっき言ったとおり、狭いアパートの中で、その前から何者かが侵入して、僕と母に気づかれることなく、隠れ通していたとは思えない。事実、その日の朝、母は自分の布団を畳んで、押入に入れたんだ。それから、僕の子ども用の布団を端に寄せて、小さなコタツを出したんだ。」

「こたつにもぐって寝てれば、食事の時とかめんどくさくなくて、よかったのに。」と倉岡くん。いや、そこはどうでもいだろう。

「コタツは、君の布団と押入の間にあったのかい？」と島川くんが尋ねたので、黙ってうなずいた。

「じゃあ、コタツの上に置いてあったものが、何か、まぎらわしい音をたてたんじゃないの？」

「いや、コタツの上には、お茶の入ったヤカンがあっただけだったと思う。食べた後の食器は、流しに持って行って、水につけておいたからね。それに、物音にせよ、うめき声にせよ、確かに、押入の中から聞こえたんだ。」

「一応、確認しておくが、それで、君は押入を開けてみなかったんだな？」と島川くん。僕はうなずく。

「当然、押入のふすまを開けて、中を確認してみたい衝動には駆られた。だけど、開けてはいけないと思って、開けなかった。かわりに、誰かいるの？と尋ねてみたけど、返事はなかった。物音も、うめき声も返ってこなかった。」

倉岡くんが言った。

「天井裏から侵入したんだ。そのゴトツという音は、天井板をはずして置いたときの音だ。うめき声はその穴を通るのがきつかったんだらう。」

やれやれ、そんなアホな。

「で、賊は、押入に入って何をしてたんだい？そこでじっとしてただけか。何のために？それで、帰るときはまったく無音だった、とこう言いたいのかい？」

「泥棒するつもりで来たが、人がいるのに気づいて、何もせず、ばれないようにそっと引き返したのさ。」

「音は下段あたりから聞こえたように思ったが、な。それに、天井裏に上がるのは、降りてくるより腕力があるだろう。降りるときに物音がして、上がるときにしないというのは納得しかねるね。まだあるよ。天井裏から侵入を企てたのなら、いきなり押入から侵入するのはリスクが高い。まず、居間の上から様子を探るべきだと思うけど。それに、その前後で、他の部屋や近隣で泥棒に入られたという被害がありそうなものだが、そういう話は聞いたことがない。」

でも、とか何とか言い募る倉岡くんは、僕は厳しく、却下！と一言言い放った。

「隣の部屋の人だったということはないのかい？」

ふいに、倉岡くんが言った。

「いや、隣の部屋はないんだよ。」

僕の答えに、全員、キョトンとした。無理もないか…。ちゃんと説明しなければ…。

「うちは、アパートの端の部屋だったんだ。しかも、二階建ての二階だった。だから、押し入れの奥の壁の向こう側にあったのは、何もない空間だけだったんだよ。」

「廊下とかもなかったのか？」

「なかった。何というか、各部屋の入り口が並んでいる前に廊下があって、その両端に金属の、歩いたらカンカンいう階段がついてる形だったんだ。」

「あー、わかる、それ。」と倉岡くん。「典型的な安アパートのスタイルだよな。」

こら。安アパートは失礼だろう。ま、その通りだったんだけど。

「階段の途中に立っている人が物音を立てたり、何か声を出したりしたんじゃないのか？」と島川くん。

「だったら、もっと低いところで音がするだろう。はっきりと、押入の上段あたりから聞こえたんだから。」

「距離感から考えても、室外に音源があったとは考えにくいな。」と島川くん。ぐるりと、頭をめぐらせて、黒神くんの顔を見て、君なら、この真相が分かりそうだと思うんだけど、と言った。

「いや、さっぱり分からん。こいつばかりはお手上げだ。」

黒神くんはそう言ったが、同時に、不自然に目をそらしたように、僕には思えた。本当に分からないのか、何か思うところがあってごまかしているのか、突っ込んで訊いてみようと思ったのだが、

「お！もう、雨も上がってるぜい！」と、倉岡くんの素っ頓狂な声が響いた。島岡くんも窓の

外を見て、あ、ホントだ、とか言っている。

結局、夜遅くまで悪かったね、とか言いながら、僕たちは黒神くんの部屋を出て、それぞれの家（というか、下宿先だけど）に帰っていった。とうとう、僕の疑問は切り出せないままだった。

エピローグ

僕はどうしても、あのときの黒神くんの態度が気になっていた。それで、翌日、ランチに彼を誘った。彼は乗り気ではなさそうだったが、一応オーケーしてくれた。

大学の近くの喫茶店で気まずい昼食をとった。食後の珈琲をすすりながら、意を決して、僕は切り出した。

「あのさ、昨日の夜、最後に僕がした話だけどさ、島川くんが君に意見を求めたら、分からないと言ったよね。」

「ああ、確かにそう言った。」

「でも、そのとき、目をそらしたよね？」

「そうだったかな？」

「とぼけても無駄だ。僕はちゃんと見てたんだ。僕も、誰かが謎を解いてくれるなら、君しか以内と思って、期待していたんだ。あのことは、僕にとっては、思い出したくない記憶なんだ。なぜ思い出したくないのかもよく分からない。それでも思い出すことがある。そのたびに、何かすごくもやもやとした気分になる。怖いという気持だけじゃないんだ。胸が苦しいような、なんとも言いようのない、不快感があるんだ。だけど、君が倉岡くんと島川くんの話を聞いて、見事に謎を解いたのを見て、ひょっとしたら、僕を苦しめてきたこの記憶についても、解決してくれるかもしれないと期待して、辛いのをこらえて、話したんだ。だから、分かったことがあるなら、何でもいいから、話してほしいんだよ！」

いささか語気が鋭くなってしまったが、どうしても、あの奇妙な現象に対する、合理的な解決を得たいという気持からだ。少なくともその気持は、黒神くんにも伝わったはずだ。黒神くんは困ったような顔をしていたが、静かな声でこう言った。

「やれやれ、本気で憶えてないようだな。」

「何を？」

「やっぱりな…。仕方ない、話をしよう。だが、その前に言っておくべきことがある。」

そう言って、黒神くんは珈琲を一口すすった。

「人は、あまりに辛い記憶はわざと忘れることがある…というより、無意識下に押し込めて、出さないようにすると言った方が正確かもしれないが。僕はある理由で、君がこの状態になっているのだと判断した。もちろん、その『ある理由』についても、話すけど…もし、僕が話す課程で君が、忘れていたことを思い出したら、そう言ってほしい。その時点で、俺は話をやめる。いいな？」

僕がうなずくと、黒神くんが語り始めた。

「まず、昨日、君が話した状況から考えて、音なり声なりは、押入の中で発せられたと考えるより他にないだろう。その点は、昨日、島川くんたちが検討したとおりだ。それとは別に、君の

話の中で、いささか奇異に思われたことがいくつかあった。まずは、君のお母さんの態度だ。もう、小学校四年生になってたんだらう？三十七度二分くらいの熱で、心配しすぎじゃないか？もちろん、人によって違うけど、俺の親なら、熱冷ましを飲んで、とっとと学校に行け！と言ってただらうな。それだけじゃない。昼食べるおかゆは作って、置いていってくれたんだらう。晩飯の用意はなぜしてない？」

僕は虚を衝かれた感じがして、黙って、黒神くんの顔を見た。

「もちろん、仕事から帰ってきてから用意するつもりだったんだらう。だったら、なぜ、風邪薬は二回分、出してあった？昼飯のあとの一回分だけでいいじゃないか。むしろ、君が昼飯食った後、うっかり薬を二回分、まとめて飲んだりしたら、どうなるかわからない。」

「それから、君のおもちゃ箱だ。動かすたびに鈴の音がした、と言ってたが、鈴の音がしたのは、何のおもちゃだ？憶えてるか？」

そう言われてみると、変な気もする。四年生ぐらいのときに気に入ってたのは、ミニカーとかだ。鈴の音がするようなものが何かあったか、思い出そうとしたが無理だった。思い出そうとすると、何か、独特の不快さが込み上げてきた。

「とどめは、君が押入を開けなかった理由だ。何と言ったか、憶えてるか？開けたらいけないと思ったからだ。怖いから、とか、おばけがいたらどうしよう、とかじゃなく、だ。」

黒神くんはここで一息ついた。

「どうだ、思い出したか？」僕はあわてて、首を振った。

「なら仕方がない。言ってやろう。これらのことから考えられるのは、君よりもはるかに小さい子どもの存在だ。」

子ども？いや、僕のところは母子家庭で、ずっと、母と僕、二人きりで暮らしてきたはずだ。

「そう考えれば、すべて、つじつまが合う。君の小さな弟だか、妹だかは君と同じ時に風邪をひいて、高熱が出ていた。四十度以上もあったから、学校に休みの連絡をした。年齢によっては、学校ではなく、保育園とかだったかもしれないがね。そして、その弟か妹に何かあったらすぐに電話するように、君に頼んだ。おそらくはそのとき、その子が寝てるから、むやみに押入を開けないように注意したんだと思う。君の方は、風邪と言っても症状が軽かった。小四の男の子のことだ、ちょっと熱が下がって元気になったら、遊び回るかもしれない。俺も覚えがあるが、その年格好なら、ごっこ遊びとか好きだったんじゃないか？プロレスごっこ、怪獣ごっこ...平たく言えば、取っ組み合いだ。そうでなくても、家の中を走り回ったりして、誤ってぶつかるようなこともあるかもしれない。だから、まだ小さい下の子は、押入の中にある布団の上に寝かせてあった。だが、四年生の君は文字通り、ふすまを開けてはいけない、と受け取ったのだらう。」

え？まさか...いや、しかし...

「食事や薬にしても、そうだ。君自身はなかなかの美食家だから、おかゆが柔らかすぎたのが不満だったようだが、君の弟か妹かは、普通のご飯や固めのおかゆでは、食べにくかったんだらうね。高熱のせいもあったんだらう、あまり食欲がなかったようだね。もちろん、風邪薬は二回分、置いてあったんじゃない。二人分、あったんだ。衣装ケースは一人に一つずつあったんだ

。おもちゃ箱の鈴の音は、ガラガラか、それに類するおもちゃの音だろう。だから、君は、それが何のおもちゃだったか、憶えていない。その記憶は抑圧されてしまったんだ。...どうした、顔色が悪いぜ。」

そりゃそうだろう、僕は全て思い出した。僕が妹を死なせた日のことを。

一その日、僕は不満だった。ちょっとしんどいけど、学校に行けないほどではなかった。いや、僕の好きだった、図工の時間があったので、むしろどうしても行きたかった。でも、小さな妹の面倒を見るように言いつけられて、ちょっとむくれていたのは確かだ。とはいえ、できるかぎりのことは、ちゃんとしたつもりだ。

母からは、お昼になったら、おかゆを食べて薬を飲むように言った。ちゃんと、絵里子ちゃんにも食べさせて、お薬飲ませてね、と言っていた。僕はその通りにした。年齢の割にはしっかりした子どもだったと思う。

母は、妹を押し入れの下段に寝かせるために、衣装ケースなどを端に寄せて、小さな布団を反対側に敷いてあったのだが、僕はふと思いついて、二段に積んであったのを横に並べて、その上に布団を敷いた。布団を並べて寝ていた僕にとって、当時、二段ベッドが憧れだった。ベッドをつくってやったつもりだったのだ。

そこから、妹が転がり落ちた。高さは低かったが、頭から落ち、体が反対側に倒れこむような形になったため、首が折れ曲がるような体勢になった。ゴトツというのは、そのときの音だったのだ。もちろん、そんなことがあれば、妹は火がついたように泣いたはずだ。だが、うめき声のようなものを漏らしただけだった。だから、当時の僕は大きく痛くなかったのだろうと思ってしまった。それで、母に電話しなかったのだ。しかし、今はその意味がはっきり分かる。それは、つまり....

気がつくのと、黒神くんが僕の名前を呼んでいた。ぼんやりと、僕は、彼の顔を見た。

「大丈夫か？やっぱり、話さなきゃよかった。刺激が強すぎたんだ。」

「いや、話してくれてよかった。ありがとう。」

僕はそう言った。母は、僕を責めなかった。形ばかりの小さなお葬式が済んだ後、早々に、母は妹がいた痕跡をぬぐい去るように、いろいろなものを捨て去り、妹のことを口にしなくなった。不幸な事故を僕が速く忘れられるようにという配慮だったのだろう。しかし、母も苦しかったはずだ。

今、一応、年齢だけは大人になって、僕ももう、この記憶としっかり向き合って生きなくてはならないのだろう。黒神くんには、本当に感謝している。だが、僕の心のどこか片隅には、彼を恨む気持が巣くってもいる。この気持も、抱きしめてなだめてやりながら生きなくてはならないのだろう。

あとがき

今回は推理ものにチャレンジしてみましたが、正直かなり難しかったです。推理といえるほどの内容にはできなかったけど、創作を続ける上で、勉強にはなったと思います。

拙い作品を読んでもくださった方々、本当にありがとうございます。

1. プロローグ

1. 第一話 映画館の不思議

1. 第二話 消えた被害者

1. 第三話 開けてはいけない襖

1. エピローグ

1. あとがき

夏の夜の現実

あすか ころも





プロローグ

「えーっ、雨が降ってるよ！天気予報では言ってなかったのに！」

ドアを開けた島川くんが大きな声をあげた。

「げっ、俺、傘持ってねえよ！」

倉岡くんが叫ぶのを聞いて、あ、僕もだ...と呟いたのが、僕こと、桐原辰哉。

「雨が上がってから、帰りゃいいじゃないか。」

落ち着いた声でそう言ったのが、この部屋の住人で、今夜、僕ら悪友の訪問を快く迎えてくれた黒神くんだ。

「雑魚寝でよけりゃ、最悪、泊まっていても構わないぜ。」

黒神くんの言葉が決定打となって、帰りかけた三人が再び、黒神くんの部屋に戻った。夏休みに入って、帰省してしまった友人が多い中、実家に戻らない下宿生ばかりが缶ビールやおつまみを持ち寄って、大いに盛り上がっていたのだ。

再び、部屋の中に戻ったはよかったが、今さら、元のテンションに戻れるはずもなく、何となく白けた感じになってしまった。誰かが何かを言っても、話がつながらない。そのうち、倉岡くんがこんなことを言い出した。

「せっかく蒸し暑い夏の夜なんだし、百物語でもやろうか？」

「百物語？詳しいことはよく知らないが、怪談を百個、話すというアレか？それはさすがに徹夜仕事になるんじゃないか？」

反対しようと思ったが、僕が口を開く前に、黒神くんが口を開いた。

「一人平均、二十五話ずつ、怪談を話さなきゃいけない計算になるぜ。みんな、そんなに知ってるのか？少なくとも、俺はそんなには思いつかないぞ。」

「いや、時間つぶしだから、そんなにたくさん語らなくていいよ。一人、一話ずつで一周して、まだ雨が降ってたら、また別の暇つぶしを考えたらいい、ぐらいいい感じで。」と倉岡くん。

「あいにく、俺は非合理的な話は信じない。だから、怪談のたぐいは話すネタとしては持っていない。すまないが、聞き役に徹するよ。」

黒神くんは生あくびを噛み殺しながら、そう言った。本気で、怪談話には興味がないようだ。それでも、我々悪友たちは本来のこの部屋の住人の意向を無視して車座になった。そして一

「じゃあ、言い出しっぺの俺から、始めるからな。」

倉岡君がまず、口を開いた。

第一話 映画館の不思議

「これは、こないだ実家に帰ったときに、俺が姉貴から聞いた話なんだが、怖いというよりは、ちょっと不思議な話なんだ。

姉貴には、最近つきあい始めた彼氏がいるんだが、その彼氏と二人でなんとかいう映画を観に行ったときの話だ。ほら、なんて言ったっけ、深夜ドラマが原作の、推理ものみたいなやつ。...そうそう、それぞれ。

まあ、映画のタイトルはどうだっていいんだけど（ここで、どうでもええんかい！と島川くんの突っ込みあり）、映画館に入ったら、ものすごく混んでいて、びっくりしたらしい。全席指定の映画館で、彼氏が前売り券を買ってしてくれたんだけど、かなり後ろの席で、しかも左端に近い位置だったから、ずいぶんと文句を言ってたんだけど、実際に入ってみて、なるほど、こりゃしょうがないなあ、って納得したらしい。なんでも、二人分並んで空いていたのが一ヶ所だけだったから、チケットと席についてる番号を突き合わせなくても、すぐに場所が分かったんだってよ。そんなんで、大いに彼のことは見直したんだそうだ。この話を聞かされたとき、たっぴり一時間は姉貴のノロケ話も聞かされたんだ。（いや、それこそどうでもいいだろう、と僕。）まあ、そうなんだけどな。

で、ここからが本題なんだ。映画が始まる少し前に、同じ列の右の方に座っていた女性が立って、姉貴の前を通過して、どこかに行った...ちょっとしたら、誰か男の人と一緒に戻ってきた。そして、二人が空いた席に座ったと言うんだ。

ま、それだけなんだけど、これってちょっと変じゃないか？

それだけ話すと、倉岡くんは口をつぐんで、一同を見回した。

一瞬、座が静かになった。ん？席が全部埋まった列から、一人だけ立ち去ったのなら、二人が戻ったときに、空いている席は一つしかないはず。二人が座れるはずはない。確かに変な話だが...

最初に口を開いたのは島川くんだった。

「そりゃ、言っちゃなんだけど、君のお姉さんが勘違いしてたんだろう。その列は元々、もう一人分、席が空いてたんだよ。」

「それは、この話を聞いた誰もが、最初に考えることだろう。俺も、姉貴にそう言ったんだ。だけど、絶対にそんなことはないと言うんだ。」

一同、ホントかよ？という顔をしていたのだろう、さらに倉岡くんは言葉を継いだ。

「姉貴だけが言うんだったら、俺も正直、あやしいと思うんだけど、一緒に行った彼氏もそう言うんだ。絶対、間違いはないってよ。姉貴はともかく、彼氏の方は結構しっかりしてるから、間違いはないと思うぜ。」

倉岡くんとしてはこの信憑性を主張したいのだろうが、お姉さんが聞いたら怒り出しそうなことを言う。いや、彼氏が褒められたら嬉しいのかな？その辺、どうなんだろう？

「まあ、今の話に間違いがないなら、確かに不思議なことだな。」

島川くんがぼそっと言ったとき、黒神くんが芯から不思議そうに言った。

「で、今の話の、何が不思議なんだよ？」

え？何言ってるの？この人…。

「倉岡くんが怖いというよりは不思議な話だっていうから、いつ、不思議なことが起きるんだろうと思って、楽しみに聞いてたんだけど、最後まで聞いても、不思議なことがでてこないからさ。どうしたのかと思って。」

「え？全部の席が埋まった列から、一人だけが出て、後に二人座ったら、不思議だと思わないか？」

「だから、二人が立ったんだろうよ。」

黒神くんはこともなげに言う。

「席を立った女性が君のお姉さんの前を横切ったときに、誰かもう一人、並んだ席の反対側から出ていったんだろうよ。映画館の席って、椅子が動かさないし、前との間もそんなに広くないから、前を人が横切るときに、ちょっと詰めなきゃいけないだろ？前を通っている人に気をとられて、反対側から人が出ていっても気がつかなかったんだろう。何も不思議はないよ。」

「でも、そんな偶然ってあるか…？」

「偶然？二人が同時に、反対側から出ていったのが、か？いや、偶然じゃないだろう。」

僕たちは黒神くんの顔をじっと見つめた。どういうことだ？偶然じゃない？

「席を立った女性が、もう一人、誰か男性を連れて戻ってきたんだろう？その人と隣同士で座るために、元々隣にいた人に、席を替わってもらったんだろう。」

「要するに、こういうことだ。君のお姉さんたちは、早めにチケットを押さえたから、二人で並んで座ることができた。だけど、二人で観に来て、離ればなれの席しか残ってなかった人もいた。仕方なく離れた席に座ったけど、二人で一緒に映画を観たいから、隣の人に席を替わってもらえないかと交渉したんだろう。幸い、隣の人が席を譲ってくれたんで、その女性は連れの男性を呼びに行った。席を譲った人は、別にどこで観てもいいと思ったんだろう、近くの空いた席に移った。そのときに、反対側から出ていった、それだけのことだろう。」

なるほど、そう考えれば辻つまが合うだろう。特に不自然なところもないように思える。

「そうか、なるほど。この話を聞いてからずっと、胸に何かがつかえてるような気分だったけど、これでスッキリしたよ。」

倉岡くんはそう言って立ち上がると、窓から外を見た。

「雨はまだ降ってるけど、百物語はどうする？まだ続けるかい？」

現金なものだ。こいつ、今の話の真相が分からなかったから、みんなに意見を聞いたかっただけだろう。百物語とか、関係ないじゃん。と思ったら、島川くんが切り出した。

「僕も聞いてほしい話があるんだ。さっきの話よりは、怪談に近いんじゃないかと思うけど、

僕自身が実際に体験した話なんだ。」

倉岡くんも座った。僕らは話を聞く体勢に入った。

1. プロローグ

1. 第一話 映画館の不思議

1. 第二話 消えた被害者

1. 第三話 開けてはいけない襖

1. エピローグ

1. あとがき

第二話 消えた被害者

一しかも、これを体験したのはごく最近のことなんだ。夏休みに入ってすぐ、実家に帰ったんだ。二泊しただけだけどね。弟が剣道やっててね、地元の大会に出るっていうんで応援に行ってきたんだ。

まあ、うちの弟は予想以上にがんばって、ベスト8まで進んだから（ここで一同より、おおーっと感嘆の声）、帰りは外食したりして、かなり遅くなったんだ。N市の体育館が会場だったんだけど、そこから帰ってくる途中、親父のワンボックスカーで山道を走っていたときのできごとなんだ。

右側がすぐに崖で、左側が切り立った斜面になっている、細い道だった。どれぐらいって？車2台がすれ違うのはかなり難しいぐらいの道幅だ。しかも、結構、曲がりくねっている感じなんだ。だから、親父もかなり神経をつかって運転していたと思う。狸坂って言って、地元でも有名な難所だったからね。

助手席にはお袋が座っていた。後ろの席に僕と弟が座っていた。とはいえ、車が走り出してすぐに弟はうとうとし始めた。疲れてたんだろうね（なんせベスト8だから、と倉岡くんの声）。しょうがないから、僕は見るともなく、窓から外を見ていた。崖の下にはところどころ灯りが見えて、なかなかいい雰囲気だった。久しぶりに剣道の試合とか見て神経が昂ぶっていたのか、全然眠いとは思わなかった。

だけど、大きなカーブを曲がる...というか、回り込んでいったとき、突然、親父が急ブレーキを踏んだ。弟もびっくりして、目を覚ました。みんな、前につんのめりそうになったからね。僕はまだ起きてたから咄嗟に前のシートに手をついてよかったけど、寝ていた弟は助手席の椅子にぶつかって驚いていた。親父が振り向いて、大丈夫か？と言った。僕はうなずいたが、弟はなんだよ、びっくりするじゃん、とかなんとか文句を言った。

親父は、慌ててシートベルトを外しながら、それだけしゃべれりゃ大丈夫だろ、とか言った。当たった？とお袋が震える声で尋ねるのが聞こえた。いや、大丈夫のはず、と親父が答えて、ドアを開けて外に出た。

どうしたの？とお袋に訊いてみたら、人に当たっちゃったかも、突然、出てきて前を横切っていたの、という返事だった。声が震えていた。驚いて、僕も車を降りた。

降りてみたが、親父は眼につかなかった。あれっ？と思って見回すと、車の後ろで親父はじっと立っていた。僕は、大丈夫だった？と訊いたんだけど、親父はわからない、とぶっきらぼうに答えてただけだった。分からない、というのも妙な話だろ？誰かいたんなら、その人に話を聞けばいいんだから。何言ってんだろう、と思いながら、親父の方に近寄っていったんだけど、親父ときたら、僕の方を見もせず、斜め後ろの道路の端のあたりをじっと見ているんだ。そのことに気づいて、よく見てみると、きれいな花束が置いてあった。夜目にも白い、菊の花だ。親父を見

ると、魅入られたようにじっとその花束を見つめているんだ。

なんだか気味が悪くてね、何見てるんだよ、とわざと大きな声で言ってみた。喉はカラカラに渴いていた。そうしたら、親父は、ハッとしたように僕を見た。そのとき、初めて僕の存在に気がついたような感じでさ。もう一度、何見てるんだよ、と言ったら、黙ってその花束を指さしたんだ。

何だよ、あれ、とか言ったんだと思う。正直なところ、それが何を意味しているかは僕にも分かっていた。分かっていたけど、認めたくなくて、わざとそう言ったのかもしれない。

親父は、つぶやくように、花束だよ、見りゃわかるだろ、とか言ったんだ。それから、カーブを曲がってきたところで、目の前に人が飛び出してきたんだ、慌てて急ブレーキを踏んだけど、当たったような感触はなかった、でも車を降りてきたら、誰も見当たらないんだ、それで、あそこにあれがあったんだ、と言うんだよ。

今さら言うまでもないけど、見通しの悪い道路の端に花束が置いてあったら、そこは交通事故、それも死亡事故が起こった現場だということだろう。親父はそのことと、突然あらわれ、またどこへとも知れず消えていった人影を結びつけて考えているのだろう、車の前に飛び出てきたのは、そう遠くない過去にここで非業の死を遂げた誰かの霊だったんだと考えているのだろうということは想像に難くなかった。そんなばかな、とは僕も思った。だけど、道路の片側はガードレールがついてるとはいえ、崖になっている。隠れるようなところはどこにもない。無理に外側に出たら、落っこちて、大ケガをするのがオチだ。ちなみに、花束が置いてあったのも、そっち側だった。逆の方は切り立った斜面で、目の前にコンクリートの壁が立ちはだかっているような格好だった。一応、上の方は土になっていて樹も生えているが、そこまでは3メートル以上はありそうだった。僕らに気づかれずに、そこを登っていったとは思えない。もちろん、花束を見に行ったときに見たけど、崖の斜面にへばりついている人もいなかった。

車の前のところを見てみたが、何かにぶつかったような跡はなかった。だから、実体のある人にぶつかったわけではないことは確実だ。

周りを調べてみたけど、結局、何も分からないまま、二人とも車に戻った。人とぶつかりそうになったものの、実際に死体が転がっているわけでもなし、怪我人がいるでもなし、車の前に出てきた人影は、車とぶつかることなく、そのまま消えてしまったと考えるより他ないという結論に達したわけだ。一だけど、実際にそんなことが可能なのだろうか？それが、ずっと心の隅に引っかかっている疑問だ。僕も、まさかそれが幽霊だったとは思わないが...なんとも不思議で気味の悪い話だろう？

「うーん、率直に言って、担がれたんじゃないの？」

倉岡くんがぶっきらぼうに言った。

「担がれた？」

島川くんが不審げに聞き返した。

「ああ、それ、お父さんのいたずらみたいなものじゃないの？」

島川くんは少しカチンときたような表情を一瞬見せたが、落ち着いた声で答えた。

「いや、うちの親父はそういうことをするタイプじゃない。それに、結構、夜も遅くなってきているのに、そんなことをして、無駄に時間をとったとは思えない。」

倉岡くんはちょっとすねたような感じで黙ってしまった。島川くんは意図的に彼から目を逸らしているようだ。

「車から降りて外を探したのは、君とお父さんだけだったのかい？お母さんと弟さんはずっと車の中だったの？」

僕はちょっと訊いてみた。特に深い意味はないが、ちょっと陰悪なムードになりそうだったので、何か別の質問を試みようと思ったのだ。

「うん。車に戻ったとき、弟はおでこを押さえていた。助手席の背もたれにぶつけちゃったからね。かなり痛そうだった。車に戻ったときに、二人に窓の外に人影はなかったか訊いてみたが、親父と僕以外には誰も見かけなかったと言ってたな。…何か、考えがあるのかい？」

いや、特に考えがあるわけじゃないんだけど…と口籠もってしまったが、ふとある仮説を思いついた。

「下、だよ。」

僕は思わず声を張っていた。これは結構、いけるんじゃないか。

みんな、きょとんとしている。意外だろうが、これが真相だという自信があった。ちょっともったいぶりながら、僕は続きを話した。

「車の下だよ、車の下。謎の人物はぶつかりそうになったとき、地面に倒れ込んで、車の下にもぐった格好になった。そのまま、車が走り去るまでそのまま隠れていた。もしくは、君とお父さんの死角に入るように、車そのものを盾にしながら回り込んで、逃げ出したんだ。」

「車の下に、人が隠られるほどのスペースがあるかな？猫がいるのを見かけたことはあるけどねえ。」

倉岡くんが嫌みっちらしく言った。

「うーん、結局、誰も見当たらずで、再度、車が走り出した後、僕はしばらく後ろを見ていたんだが、人影はなかったんだ。それから、車の影に隠れて回り込む、というのは無理だと思う。二人がどっちを見るか分からないから、どこに隠れてどっちに逃げるかの判断が相当、難しいと思うんだ。」

言われてみればその通りだが、僕も引っ込みがつかなくなった。

「かなり長い距離を、車体の底面にしがみついていた、というのはどうだ？」

「ええっと、君はこう言いたいわけか？謎の人物の正体はスパイダーマンだった、と。」
そこまで言われると、さすがにぐうの音も出ない。

「いっそ、そこには元々誰もいなかった、というのはどうだ？」と倉岡くん。

「どういうことだよ？」

「実は、人が歩いていたのではなく、ホログラム映像だったのだよ。」

「そんなこと、実際にできるのかい？」とあきれ顔の島川くん。

「試作品の実験をしていたというのはどうだろう？」

「もしそうなら、通行規制をすとかして、安全を確保してからやるだろうな…。というか、そもそも、実験室とかじゃなくて、路上でそんな実験をする理由は何だい？」

「まあ、これが正解だとは思ってないさ。こうして検証してみることで、その人物が確かにそのとき、その場所にいたことがはっきりしたじゃないか。」

屁理屈である。さすがに、島川くんがイラッとした表情を見せたので、僕は話題を変えようと思って、言ってみた。

「そもそも、その人はなぜ夜遅く、そんなところを歩いてたんだらうな。」

すると、黒神くんが、

「どうやって姿をくらましたかはともかく、何のために夜遅くそこにいたかは、大方、見当がつくだろう。」

その他の全員が、えっ？という顔をして、一斉に黒神くんを見た。

「なんだ、不思議そうな顔をするなよ。さっき、島川くんが、きれいな花が置いてあったと言ったじゃないか。このクソ暑いのに、路上に置かれた花束がそんなに長持ちするとは思えない。おそらく、その人物は、花束を置きに来たんだらう。そして、帰ろうとして、自動車に轢かれかけた。」

「だったら、昼間に来たらいいじゃないか。なんでそんな時間に…。」

「人目を避けたい理由があったんだらう。おそらく、その人は交通事故死の犯人、というか、加害者ではないかと思う。罪悪感から、被害者の供養のために花束を持っていきかけたが、捕まりたくはないから、人目を避けて夜中に行ったんだ。絶対にそうだとは言い切れないだろうが、無理のない解釈ではあるだろう。」

なるほどね、と島川くん。

「じゃあ、どうやって姿を消したんだらう。まさか、車に撥ね飛ばされて、崖の下に落ちたとか言うんじゃないだらうね。」

「この話のキモはそこじゃないと思う。どうやって姿を消したかではなく、どうやってそこに来たか、だらう。そこから考えていくと、真相らしきものが見えてくるんじゃないかと思う。」

「どういうことだ？」

「ん？道路の状況を聞くかぎり、その人物は徒歩で来たとは考えにくいように思える。もし、車かバイクなんかで来たんなら、すぐ近くにそれらを置いて、花束を置きにいったはずだらう。だけど、島川くんの話では、近くに車とかは見当たらなかったんじゃないかと思うんだ。」

「そうだ。そこは考えてなかったけど、無人のバイクとか自動車が置いてあれば、気づかないはずはないよ。」

黒神くんは、そうか、と言った。

「やっぱりな。停まっている車かバイクを見たら、印象に残るだらうから、話に出てくるだろうと思っていた。けどなかったということは、カーブをさらに回り込んだ先とか、君たち家族の乗っていた車から見えないところに車かバイクが停めてあって、それで走り去ったか、どっち

かだろう。だけど、どう考えても、夜の山道を、花束を手を持って歩いてきたと考えるのは、少々、無理があるだろうな。事故当時は、車かバイクに乗ってきたんだろうし、今回も、そういうたぐいのものに乗ってきたと考えるのが妥当だろう。ま、俺はバイクだろうと思うけどな。その方が目立たないし、機動力がある。」

「おい、ちょっと待てよ。」と倉岡くんが声をあげた。

「その道路を歩くのが不自然だというのなら、そもそも最初の事故はどうやって起きたんだよ？」

「最初の事故？」

「そう。謎の人物が加害者となったと想定している事故のことだよ。その道を歩いている人をはねたというのなら、やはり不自然だろ。」

「被害者が歩いていたとはかぎらない。バイクと車の事故とかかもしれない。俺は勝手に、カーブを曲がる時にスピードが出過ぎていてふくらんでしまった対向車同士がぶつかったんじゃないかと思ってるがね。外側の崖に近いところに花束を置いたのは、そのあたりでぶつかったからだろうと推測しているんだ。」

ふうん、と言ったきり、倉岡くんは黙ってしまった。よしよし、ぐうの音も出ないというやつだね。さっきの僕と一緒にだね。

「さて、話を本筋に戻そう。謎の人物は、バイクか車でやって来た。彼、あるいは彼女の心理としては、目的の場所のすぐ近くにそれを置いておくのは抵抗があっただろう。少し離れたところに、それを停めておいた。花束を置いた後、彼、あるいは彼女の立場としては、自分が乗ってきた乗り物のところに大急ぎで戻ったんだろうな。ゆっくり、安全を確かめてから道路を渡っていれば、車に轢かれそうになることもなかったろうけど。」

「そうだ、それからその人はどうした？どうやって、姿を消した？」

「いや、どうもしないだろうよ。そのまま、乗り物のあるところまで走って、それに乗って逃げただけさ。」

これには一同、ぽかんと口を開けたままだ。一瞬の間があって、島川くんが問いかけた。

「なんだって？どういうことだよ？どこかに隠れたとかじゃなくてか？」

幾分、怒気を含んだような口調になったのも分かる気がする。

「そういうことだ。もう少し詳しく言うなら、角度の問題だ。君はおそらく、前を横切ったという言葉聞いて、人と車がほぼ直角に交わるイメージを持っただろうが、実際のところはずっと浅い角度で交わっていたはずだ。つまり、実際には君たちが乗っていた車から見て、その人物が斜め前に逃げていく感じだな。」

「その人物は人に見られたくない。花を置いた後、大急ぎで乗ってきたもののところに戻った。とすればだ、おそらくはほぼ一直線にそこに向かった。おそらくは全力疾走で。道は大きなカーブになっていて、それは、君たちから見えない位置に置かれていた。お父さんは急ブレーキが間にあう程度には手前で、ブレーキを踏んだ。車はそのまま直進してから停まった。つまり、向きとしては、かなりカーブの外側に向いた状態で停車した。逆に、その人物はカーブの内側に回

り込むように移動していた。おそらく、降りた直後の位置からは、君たちが乗っていたというワンボックスカーが視界を遮っていた感じだったんじゃないかな。そして、君のお父さんは、車を降りた後、辺りを見回して、路傍の花束に気がついた。夜目にも白い菊の花だ。車の後ろを向く感じで、相手から遠ざかる方向に動く形になった。いわば、自らすすんで、そのワンボックスカーの死角になるように動いてやったようなもんだ。君は車を降りて、ちょっと周りを見て、すぐにお父さんに気がついた。だから、同じように、逃げる相手を死角に入れてやるよう動いた。二人が話をしている頃には、すでに乗ってきたものに乗って、かなり遠くまで走り去っていたんだらう。」

何か言いたそうな顔の島川くんに、黒神くんが言った。

「しょせん、世の中こんなもんだ。」

第三話 開けてはいけない襖

じゃあ、トリはお前だ、と倉岡くんにならまれた。島川くんも期待に満ちた眼でこっちを見ている。唯一、黒神くんがまたかよ、とでも言いたそうな表情で見ているのが救いだ。その表情に後押しされるように、僕は思い切って、言ってみた。

「そろそろ帰ろうよ。黒神くんが悪いし...。」

そして、助けてくれ、という思いを込めて、黒神くんの方をチラ見した。...のだが。

「いや、遠慮はいらんよ。まだ雨も降ってるし、泊まってもかまわないぜ。」

え？それは冷たいだろ、黒神くん。君だけが頼りだと思ったのに...。仕方ない。僕が体験した、いくらか怪談めいた話といえば、一つだけしか思いつかない。ただ、この話はなぜか思い出したくないのだ。怖いから、というだけではない、何かを感じるのだ。それが何かと言われると、自分でもうまく説明できないのだが...

とはいえ、メンバーからせつつかれて、仕方なく僕は語り始めた。

「うちが母子家庭だったということは、みんな知ってるよね？（無言のうなずき）これから話すのは、僕が小学校四年生の時のことだ。」

「僕は風邪をひいたんだ。確か、水曜日の夕方ぐらいから症状が出始めて、夜に近所の医者に連れていってもらって、三日分の薬をもらって帰ってきた。翌朝、熱を測ったら、七度二分だった。で、学校を休むことになって、母が電話してくれたんだ。...でも、その電話で母が、四十度以上も熱がある、と相当、深刻そうに言ってて、なんだかずる休みするような気分だったことを憶えている。」

「一応、朝ご飯を食べた後、風邪薬を飲んだ。おかゆをつくって置いてあるから、お昼はそれを食べるように、それから、何かあったらすぐに電話するようにと強く言って、母はいつものように仕事に出かけた。僕は、正直、普通のご飯とおかずの方がよかったけどな...。それはさておき、僕はテレビを見ていたが、その時間帯は子ども向きの番組はやってないし、退屈して、すぐに切ってしまった。体もだるいし、横になったら、少しして眠ってしまった。風邪薬の効果もあったのかもしれない。それで、目が醒めたら、昼過ぎだった。台所に行ったら、母の言葉どおり、おかゆと二回分の風邪薬が置いてあった。なかば糊みたいになった、かなり柔らかいおかゆを食べて、風邪薬を飲んでまた横になった。そのまま、すぐにうとうとし始めた。」

大して面白くもない話を、皆、神妙な顔をして聞いている。なんだか妙な気分だ。

「でも、押入の中でゴトツ、と音がして、僕は目が醒めたんだ。」

押入？と聞き返したのは、島川くんだ。

「そう、押入。その頃、僕と母は、六畳一間に台所とも呼べないような狭い台所とトイレだけのアパートに住んでいたんだ。風呂は近所の銭湯に行っていた。僕が寝ていたのはその六畳間で

、そこには押入があった。」

ふうん、と島川くんは納得したようだ。

「押入の中は上下二段になっていて、上段に布団類、下段に衣類の入った衣装ケースが三つと、おもちゃ箱があったくらいだった。そんな、ゴトツとかいう音のするようなものは何もなかったんだ。」

「その、おもちゃ箱に入っていたものが、何か、崩れたとかしたんじゃない？」と倉岡くん。

「いや、そこに入ってたのは、人形とかそんなものだったし、そういう音ではなかったと思うけどな。そうだ、動かすたびに鈴の音がしてたから、絶対に違うよ。断言できる。で、...そうだな、感じとしては、奥の壁に何か、固いものがぶつかったような、にぶい音だった。それに、押入の上段あたりから聞こえたように思う。」

そう言っても、倉岡くんはまだ疑わしそうな顔つきだったが、僕はかまわず続きを話した。

「僕は驚いて、しばらく、押入のふすまをじっと見つめていた。そしたら、今度はうめき声のようなものがかすかに聞こえたんだ。」

気味悪いな、と倉岡くん。島川くんは、押入の中に誰かいたんだろう、とある意味、至極当然の反応を示してくれた。だが、僕は力説する。

「中に、って誰が？いつの間に？何の目的で？まだこれから話すところだったけど、母が帰ってきたとき、僕が中から鍵を開けた。つまり、確かに鍵をかけて出かけたってことさ。母が出かけた後に、忍び込んだとは思えない。さっき言ったとおり、狭いアパートの中で、その前から何者かが侵入して、僕と母に気づかれることなく、隠れ通していたとは思えない。事実、その日の朝、母は自分の布団を畳んで、押入に入れたんだ。それから、僕の子ども用の布団を端に寄せて、小さなコタツを出したんだ。」

「こたつにもぐって寝てれば、食事の時とかめんどくさくなくて、よかったのに。」と倉岡くん。いや、そこはどうでもいいだろう。

「コタツは、君の布団と押入の間にあったのかい？」と島川くんが尋ねたので、黙ってうなずいた。

「じゃあ、コタツの上に置いてあったものが、何か、まぎらわしい音をたてたんじゃないの？」

「いや、コタツの上には、お茶の入ったヤカンがあっただけだったと思う。食べた後の食器は、流しに持って行って、水につけておいたからね。それに、物音にせよ、うめき声にせよ、確かに、押入の中から聞こえたんだ。」

「一応、確認しておくが、それで、君は押入を開けてみなかったんだな？」と島川くん。僕はうなずく。

「当然、押入のふすまを開けて、中を確認してみたい衝動には駆られた。だけど、開けてはいけないと思って、開けなかった。かわりに、誰かいるの？と尋ねてみたけど、返事はなかった。物音も、うめき声も返ってこなかった。」

倉岡くんが言った。

「天井裏から侵入したんだ。そのゴトツという音は、天井板をはずして置いたときの音だ。うめき声はその穴を通るのがきつかったんだろう。」

やれやれ、そんなアホな。

「で、賊は、押入に入って何をしてたんだい？そこでじっとしてただけか。何のために？それで、帰るときはまったく無音だった、とこう言いたいのかい？」

「泥棒するつもりで来たが、人がいるのに気づいて、何もせず、ばれないようにそっと引き返したのさ。」

「音は下段あたりから聞こえたように思ったが、な。それに、天井裏に上がるのは、降りてくるより腕力があるだろう。降りるときに物音がして、上がるときにしないというのは納得しかねるね。まだあるよ。天井裏から侵入を企てたのなら、いきなり押入から侵入するのはリスクが高い。まず、居間の上から様子を探るべきだと思うけど。それに、その前後で、他の部屋や近隣で泥棒に入られたという被害がありそうなものだが、そういう話は聞いたことがない。」

でも、とか何とか言い募る倉岡くんは、僕は厳しく、却下！と一言言い放った。

「隣の部屋の人だったということはないのかい？」

ふいに、倉岡くんが言った。

「いや、隣の部屋はないんだよ。」

僕の答えに、全員、キョトンとした。無理もないか…。ちゃんと説明しなければ…。

「うちは、アパートの端の部屋だったんだ。しかも、二階建ての二階だった。だから、押し入れの奥の壁の向こう側にあったのは、何もない空間だけだったんだよ。」

「廊下とかもなかったのか？」

「なかった。何というか、各部屋の入り口が並んでいる前に廊下があって、その両端に金属の、歩いたらカンカンいう階段がついてる形だったんだ。」

「あー、わかる、それ。」と倉岡くん。「典型的な安アパートのスタイルだよな。」

こら。安アパートは失礼だろう。ま、その通りだったんだけど。

「階段の途中に立っている人が物音を立てたり、何か声を出したりしたんじゃないのか？」と島川くん。

「だったら、もっと低いところで音がするだろう。はっきりと、押入の上段あたりから聞こえたんだから。」

「距離感から考えても、室外に音源があったとは考えにくいな。」と島川くん。ぐるりと、頭をめぐらせて、黒神くんの顔を見て、君なら、この真相が分かりそうだと思うんだけど、と言った。

「いや、さっぱり分からん。こいつばかりはお手上げだ。」

黒神くんはそう言ったが、同時に、不自然に目をそらしたように、僕には思えた。本当に分からないのか、何か思うところがあってごまかしているのか、突っ込んで訊いてみようと思ったのだが、

「お！もう、雨も上がってるぜい！」と、倉岡くんの素っ頓狂な声が響いた。島岡くんも窓の

外を見て、あ、ホントだ、とか言っている。

結局、夜遅くまで悪かったね、とか言いながら、僕たちは黒神くんの部屋を出て、それぞれの家（というか、下宿先だけど）に帰っていった。とうとう、僕の疑問は切り出せないままだった。

夏の夜の現実

あすか ころもじ





エピローグ

僕はどうしても、あのときの黒神くんの態度が気になっていた。それで、翌日、ランチに彼を誘った。彼は乗り気ではなさそうだったが、一応オーケーしてくれた。

大学の近くの喫茶店で気まずい昼食をとった。食後の珈琲をすすりながら、意を決して、僕は切り出した。

「あのさ、昨日の夜、最後に僕がした話だけどさ、島川くんが君に意見を求めたら、分からないと言ったよね。」

「ああ、確かにそう言った。」

「でも、そのとき、目をそらしたよね？」

「そうだったかな？」

「とぼけても無駄だ。僕はちゃんと見てたんだ。僕も、誰かが謎を解いてくれるなら、君しか以内と思って、期待していたんだ。あのことは、僕にとっては、思い出したくない記憶なんだ。なぜ思い出したくないのかもよく分からない。それでも思い出すことがある。そのたびに、何かすごくもやもやとした気分になる。怖いという気持だけじゃないんだ。胸が苦しいような、なんとも言いようのない、不快感があるんだ。だけど、君が倉岡くんと島川くんの話を聞いて、見事に謎を解いたのを見て、ひょっとしたら、僕を苦しめてきたこの記憶についても、解決してくれるかもしれないと期待して、辛いのをこらえて、話したんだ。だから、分かったことがあるなら、何でもいいから、話してほしいんだよ！」

いささか語気が鋭くなってしまったが、どうしても、あの奇妙な現象に対する、合理的な解決を得たいという気持からだ。少なくともその気持は、黒神くんにも伝わったはずだ。黒神くんは困ったような顔をしていたが、静かな声でこう言った。

「やれやれ、本気で憶えてないようだな。」

「何を？」

「やっぱりな…。仕方ない、話をしよう。だが、その前に言っておくべきことがある。」

そう言って、黒神くんは珈琲を一口すすった。

「人は、あまりに辛い記憶はわざと忘れることがある…というより、無意識下に押し込めて、出さないようにすると言った方が正確かもしれないが。僕はある理由で、君がこの状態になっているのだと判断した。もちろん、その『ある理由』についても、話すけど…もし、僕が話す課程で君が、忘れていたことを思い出したら、そう言ってほしい。その時点で、俺は話をやめる。いいな？」

僕がうなずくと、黒神くんが語り始めた。

「まず、昨日、君が話した状況から考えて、音なり声なりは、押入の中で発せられたと考えるより他にないだろう。その点は、昨日、島川くんたちが検討したとおりだ。それとは別に、君の

話の中で、いささか奇異に思われたことがいくつかあった。まずは、君のお母さんの態度だ。もう、小学校四年生になってたんだらう？三十七度二分くらいの熱で、心配しすぎじゃないか？もちろん、人によって違うけど、俺の親なら、熱冷ましを飲んで、とっとと学校に行け！と言ってただらうな。それだけじゃない。昼食べるおかゆは作って、置いていってくれたんだらう。晩飯の用意はなぜしてない？」

僕は虚を衝かれた感じがして、黙って、黒神くんの顔を見た。

「もちろん、仕事から帰ってきてから用意するつもりだったんだらう。だったら、なぜ、風邪薬は二回分、出してあった？昼飯のあとの一回分だけでいいじゃないか。むしろ、君が昼飯食った後、うっかり薬を二回分、まとめて飲んだりしたら、どうなるかわからない。」

「それから、君のおもちゃ箱だ。動かすたびに鈴の音がした、と言ってたが、鈴の音がしたのは、何のおもちゃだ？憶えてるか？」

そう言われてみると、変な気もする。四年生ぐらいのときに気に入ってたのは、ミニカーとかだ。鈴の音がするようなものが何かあったか、思い出そうとしたが無理だった。思い出そうとすると、何か、独特の不快さが込み上げてきた。

「とどめは、君が押入を開けなかった理由だ。何と言ったか、憶えてるか？開けたらいけないと思ったからだ。怖いから、とか、おばけがいたらどうしよう、とかじゃなく、だ。」

黒神くんはここで一息ついた。

「どうだ、思い出したか？」僕はあわてて、首を振った。

「なら仕方がない。言ってやろう。これらのことから考えられるのは、君よりもはるかに小さい子どもの存在だ。」

子ども？いや、僕のところは母子家庭で、ずっと、母と僕、二人きりで暮らしてきたはずだ。

「そう考えれば、すべて、つじつまが合う。君の小さな弟だか、妹だかは君と同じ時に風邪をひいて、高熱が出ていた。四十度以上もあったから、学校に休みの連絡をした。年齢によっては、学校ではなく、保育園とかだったかもしれないがね。そして、その弟か妹に何かあったらすぐに電話するように、君に頼んだ。おそらくはそのとき、その子が寝てるから、むやみに押入を開けないように注意したんだと思う。君の方は、風邪と言っても症状が軽かった。小四の男の子のことだ、ちょっと熱が下がって元気になったら、遊び回るかもしれない。俺も覚えがあるが、その年格好なら、ごっこ遊びとか好きだったんじゃないか？プロレスごっこ、怪獣ごっこ...平たく言えば、取っ組み合いだ。そうでなくても、家の中を走り回ったりして、誤ってぶつかるようなこともあるかもしれない。だから、まだ小さい下の子は、押入の中にある布団の上に寝かせてあった。だが、四年生の君は文字通り、ふすまを開けてはいけない、と受け取ったのだらう。」

え？まさか...いや、しかし...

「食事や薬にしても、そうだ。君自身はなかなかの美食家だから、おかゆが柔らかすぎたのが不満だったようだが、君の弟か妹かは、普通のご飯や固めのおかゆでは、食べにくかったんだらうね。高熱のせいもあったんだらう、あまり食欲がなかったようだね。もちろん、風邪薬は二回分、置いてあったんじゃない。二人分、あったんだ。衣装ケースは一人に一つずつあったんだ

。おもちゃ箱の鈴の音は、ガラガラか、それに類するおもちゃの音だろう。だから、君は、それが何のおもちゃだったか、憶えていない。その記憶は抑圧されてしまったんだ。...どうした、顔色が悪いぜ。」

そりゃそうだろう、僕は全て思い出した。僕が妹を死なせた日のことを。

一その日、僕は不満だった。ちょっとしんどいけど、学校に行けないほどではなかった。いや、僕の好きだった、図工の時間があったので、むしろどうしても行きたかった。でも、小さな妹の面倒を見るように言いつけられて、ちょっとむくれていたのは確かだ。とはいえ、できるかぎりのことは、ちゃんとしたつもりだ。

母からは、お昼になったら、おかゆを食べて薬を飲むように言った。ちゃんと、絵里子ちゃんにも食べさせて、お薬飲ませてね、と言っていた。僕はその通りにした。年齢の割にはしっかりした子どもだったと思う。

母は、妹を押し入れの下段に寝かせるために、衣装ケースなどを端に寄せて、小さな布団を反対側に敷いてあったのだが、僕はふと思いついて、二段に積んであったのを横に並べて、その上に布団を敷いた。布団を並べて寝ていた僕にとって、当時、二段ベッドが憧れだった。ベッドをつくってやったつもりだったのだ。

そこから、妹が転がり落ちた。高さは低かったが、頭から落ち、体が反対側に倒れこむような形になったため、首が折れ曲がるような体勢になった。ゴトツというのは、そのときの音だったのだ。もちろん、そんなことがあれば、妹は火がついたように泣いたはずだ。だが、うめき声のようなものを漏らしただけだった。だから、当時の僕は大きく痛くなかったのだろうと思ってしまった。それで、母に電話しなかったのだ。しかし、今はその意味がはっきり分かる。それは、つまり....

気がつくのと、黒神くんが僕の名前を呼んでいた。ぼんやりと、僕は、彼の顔を見た。

「大丈夫か？やっぱり、話さなきゃよかった。刺激が強すぎたんだ。」

「いや、話してくれてよかった。ありがとう。」

僕はそう言った。母は、僕を責めなかった。形ばかりの小さなお葬式が済んだ後、早々に、母は妹がいた痕跡をぬぐい去るように、いろいろなものを捨て去り、妹のことを口にしなくなった。不幸な事故を僕が速く忘れられるようにという配慮だったのだろう。しかし、母も苦しかったはずだ。

今、一応、年齢だけは大人になって、僕ももう、この記憶としっかり向き合って生きなくてはならないのだろう。黒神くんには、本当に感謝している。だが、僕の心のどこか片隅には、彼を恨む気持が巣くってもいる。この気持も、抱きしめてなだめてやりながら生きなくてはならないのだろう。

プロローグ

「えーっ、雨が降ってるよ！天気予報では言ってなかったのに！」

ドアを開けた島川くんが大きな声をあげた。

「げっ、俺、傘持ってねえよ！」

倉岡くんが叫ぶのを聞いて、あ、僕もだ...と呟いたのが、僕こと、桐原辰哉。

「雨が上がってから、帰りゃいいじゃないか。」

落ち着いた声でそう言ったのが、この部屋の住人で、今夜、僕ら悪友の訪問を快く迎えてくれた黒神くんだ。

「雑魚寝でよけりゃ、最悪、泊まっていても構わないぜ。」

黒神くんの言葉が決定打となって、帰りかけた三人が再び、黒神くんの部屋に戻った。夏休みに入って、帰省してしまった友人が多い中、実家に戻らない下宿生ばかりが缶ビールやおつまみを持ち寄って、大いに盛り上がっていたのだ。

再び、部屋の中に戻ったはよかったが、今さら、元のテンションに戻れるはずもなく、何となく白けた感じになってしまった。誰かが何かを言っても、話がつながらない。そのうち、倉岡くんがこんなことを言い出した。

「せっかく蒸し暑い夏の夜なんだし、百物語でもやろうか？」

「百物語？詳しいことはよく知らないが、怪談を百個、話すというアレか？それはさすがに徹夜仕事になるんじゃないか？」

反対しようと思ったが、僕が口を開く前に、黒神くんが口を開いた。

「一人平均、二十五話ずつ、怪談を話さなきゃいけない計算になるぜ。みんな、そんなに知ってるのか？少なくとも、俺はそんなには思いつかないぞ。」

「いや、時間つぶしだから、そんなにたくさん語らなくていいよ。一人、一話ずつで一周して、まだ雨が降ってたら、また別の暇つぶしを考えたらいい、ぐらいいい感じで。」と倉岡くん。

「あいにく、俺は非合理的な話は信じない。だから、怪談のたぐいは話すネタとしては持っていない。すまないが、聞き役に徹するよ。」

黒神くんは生あくびを噛み殺しながら、そう言った。本気で、怪談話には興味がないようだ。それでも、我々悪友たちは本来のこの部屋の住人の意向を無視して車座になった。そして一

「じゃあ、言い出しっぺの俺から、始めるからな。」

倉岡君がまず、口を開いた。

あとがき

今回は推理ものにチャレンジしてみましたが、正直かなり難しかったです。推理といえるほどの内容にはできなかったけど、創作を続ける上で、勉強にはなったと思います。

拙い作品を読んでもくださった方々、本当にありがとうございます。

第一話 映画館の不思議

「これは、こないだ実家に帰ったときに、俺が姉貴から聞いた話なんだが、怖いというよりは、ちょっと不思議な話なんだ。

姉貴には、最近つきあい始めた彼氏がいるんだが、その彼氏と二人でなんとかいう映画を観に行ったときの話だ。ほら、なんて言ったっけ、深夜ドラマが原作の、推理ものみたいなやつ。...そうそう、それぞれ。

まあ、映画のタイトルはどうだっていいんだけど（ここで、どうでもええんかい！と島川くんの突っ込みあり）、映画館に入ったら、ものすごく混んでいて、びっくりしたらしい。全席指定の映画館で、彼氏が前売り券を買ってしてくれたんだけど、かなり後ろの席で、しかも左端に近い位置だったから、ずいぶんと文句を言ってたんだけど、実際に入ってみて、なるほど、こりゃしょうがないなあ、って納得したらしい。なんでも、二人分並んで空いていたのが一ヶ所だけだったから、チケットと席についてる番号を突き合わせなくても、すぐに場所が分かったんだってよ。そんなんで、大いに彼のことを見直したんだそうだ。この話を聞かされたとき、たっぴり一時間は姉貴のノロケ話も聞かされたんだ。（いや、それこそどうでもいいだろう、と僕。）まあ、そうなんだけどな。

で、ここからが本題なんだ。映画が始まる少し前に、同じ列の右の方に座っていた女性が立って、姉貴の前を通過して、どこかに行った...ちょっとしたら、誰か男の人と一緒に戻ってきた。そして、二人が空いた席に座ったと言うんだ。

ま、それだけなんだけど、これってちょっと変じゃないか？

それだけ話すと、倉岡くんは口をつぐんで、一同を見回した。

一瞬、座が静かになった。ん？席が全部埋まった列から、一人だけ立ち去ったのなら、二人が戻ったときに、空いている席は一つしかないはず。二人が座れるはずはない。確かに変な話だが...

最初に口を開いたのは島川くんだった。

「そりゃ、言っちゃなんだけど、君のお姉さんが勘違いしてたんだろう。その列は元々、もう一人分、席が空いてたんだよ。」

「それは、この話を聞いた誰もが、最初に考えることだろう。俺も、姉貴にそう言ったんだ。だけど、絶対にそんなことはないと言うんだ。」

一同、ホントかよ？という顔をしていたのだろう、さらに倉岡くんは言葉を継いだ。

「姉貴だけが言うんだったら、俺も正直、あやしいと思うんだけど、一緒に行った彼氏もそう言うんだ。絶対、間違いはないってよ。姉貴はともかく、彼氏の方は結構しっかりしてるから、間違いはないと思うぜ。」

倉岡くんとしてはこの信憑性を主張したいのだろうが、お姉さんが聞いたら怒り出しそうなことを言う。いや、彼氏が褒められたら嬉しいのかな？その辺、どうなんだろう？

「まあ、今の話に間違いがないなら、確かに不思議なことだな。」

島川くんがぼそっと言ったとき、黒神くんが芯から不思議そうに言った。

「で、今の話の、何が不思議なんだよ？」

え？何言ってんの？この人…。

「倉岡くんが怖いというよりは不思議な話だっていうから、いつ、不思議なことが起きるんだろうと思って、楽しみに聞いてたんだけど、最後まで聞いても、不思議なことがでてこないからさ。どうしたのかと思って。」

「え？全部の席が埋まった列から、一人だけが出て、後に二人座ったら、不思議だと思わないか？」

「だから、二人が立ったんだろうよ。」

黒神くんはこともなげに言う。

「席を立った女性が君のお姉さんの前を横切ったときに、誰かもう一人、並んだ席の反対側から出ていったんだろうよ。映画館の席って、椅子が動かさないし、前との間もそんなに広くないから、前を人が横切るときに、ちょっと詰めなきゃいけないだろ？前を通っている人に気をとられて、反対側から人が出ていっても気がつかなかったんだろう。何も不思議はないよ。」

「でも、そんな偶然ってあるか…？」

「偶然？二人が同時に、反対側から出ていったのが、か？いや、偶然じゃないだろう。」

僕たちは黒神くんの顔をじっと見つめた。どういうことだ？偶然じゃない？

「席を立った女性が、もう一人、誰か男性を連れて戻ってきたんだろう？その人と隣同士で座るために、元々隣にいた人に、席を替わってもらったんだろう。」

「要するに、こういうことだ。君のお姉さんたちは、早めにチケットを押さえたから、二人で並んで座ることができた。だけど、二人で観に来て、離ればなれの席しか残ってなかった人もいた。仕方なく離れた席に座ったけど、二人で一緒に映画を観たいから、隣の人に席を替わってもらえないかと交渉したんだろう。幸い、隣の人が席を譲ってくれたんで、その女性は連れの男性を呼びに行った。席を譲った人は、別にどこで観てもいいと思ったんだろう、近くの空いた席に移った。そのときに、反対側から出ていった、それだけのことだろう。」

なるほど、そう考えれば辻つまが合うだろう。特に不自然なところもないように思える。

「そうか、なるほど。この話を聞いてからずっと、胸に何かがつかえてるような気分だったけど、これでスッキリしたよ。」

倉岡くんはそう言って立ち上がると、窓から外を見た。

「雨はまだ降ってるけど、百物語はどうする？まだ続けるかい？」

現金なものだ。こいつ、今の話の真相が分からなかったから、みんなに意見を聞いたかっただけだろう。百物語とか、関係ないじゃん。と思ったら、島川くんが切り出した。

「僕も聞いてほしい話があるんだ。さっきの話よりは、怪談に近いんじゃないかと思うけど、

僕自身が実際に体験した話なんだ。」

倉岡くんも座った。僕らは話を聞く体勢に入った。

第二話 消えた被害者

一しかも、これを体験したのはごく最近のことなんだ。夏休みに入ってすぐ、実家に帰ったんだ。二泊しただけだけどね。弟が剣道やっててね、地元の大会に出るっていうんで応援に行ってきたんだ。

まあ、うちの弟は予想以上にがんばって、ベスト8まで進んだから（ここで一同より、おおーっと感嘆の声）、帰りは外食したりして、かなり遅くなったんだ。N市の体育館が会場だったんだけど、そこから帰ってくる途中、親父のワンボックスカーで山道を走っていたときのできごとなんだ。

右側がすぐに崖で、左側が切り立った斜面になっている、細い道だった。どれぐらいって？車2台がすれ違うのはかなり難しいぐらいの道幅だ。しかも、結構、曲がりくねっている感じなんだ。だから、親父もかなり神経をつかって運転していたと思う。狸坂って言って、地元でも有名な難所だったからね。

助手席にはお袋が座っていた。後ろの席に僕と弟が座っていた。とはいえ、車が走り出してすぐに弟はうとうとし始めた。疲れてたんだろうね（なんせベスト8だから、と倉岡くんの声）。しょうがないから、僕は見るともなく、窓から外を見ていた。崖の下にはところどころ灯りが見えて、なかなかいい雰囲気だった。久しぶりに剣道の試合とか見て神経が昂ぶっていたのか、全然眠いとは思わなかった。

だけど、大きなカーブを曲がる...というか、回り込んでいったとき、突然、親父が急ブレーキを踏んだ。弟もびっくりして、目を覚ました。みんな、前につんのめりそうになったからね。僕はまだ起きてたから咄嗟に前のシートに手をついてよかったけど、寝ていた弟は助手席の椅子にぶつかって驚いていた。親父が振り向いて、大丈夫か？と言った。僕はうなずいたが、弟はなんだよ、びっくりするじゃん、とかなんとか文句を言った。

親父は、慌ててシートベルトを外しながら、それだけしゃべれりゃ大丈夫だろ、とか言った。当たった？とお袋が震える声で尋ねるのが聞こえた。いや、大丈夫のはず、と親父が答えて、ドアを開けて外に出た。

どうしたの？とお袋に訊いてみたら、人に当たっちゃったかも、突然、出てきて前を横切っていたの、という返事だった。声が震えていた。驚いて、僕も車を降りた。

降りてみたが、親父は眼につかなかった。あれっ？と思って見回すと、車の後ろで親父はじっと立っていた。僕は、大丈夫だった？と訊いたんだけど、親父はわからない、とぶっきらぼうに答えてただけだった。分からない、というのも妙な話だろ？誰かいたんなら、その人に話を聞けばいいんだから。何言ってんだろう、と思いながら、親父の方に近寄っていったんだけど、親父ときたら、僕の方を見もせず、斜め後ろの道路の端のあたりをじっと見ているんだ。そのことに気づいて、よく見てみると、きれいな花束が置いてあった。夜目にも白い、菊の花だ。親父を見

ると、魅入られたようにじっとその花束を見つめているんだ。

なんだか気味が悪くてね、何見てるんだよ、とわざと大きな声で言ってみた。喉はカラカラに渴いていた。そうしたら、親父は、ハッとしたように僕を見た。そのとき、初めて僕の存在に気がついたような感じでさ。もう一度、何見てるんだよ、と言ったら、黙ってその花束を指さしたんだ。

何だよ、あれ、とか言ったんだと思う。正直なところ、それが何を意味しているかは僕にも分かっていた。分かっていたけど、認めたくなくて、わざとそう言ったのかもしれない。

親父は、つぶやくように、花束だよ、見りゃわかるだろ、とか言ったんだ。それから、カーブを曲がってきたところで、目の前に人が飛び出してきたんだ、慌てて急ブレーキを踏んだけど、当たったような感触はなかった、でも車を降りてきたら、誰も見当たらないんだ、それで、あそこにあれがあったんだ、と言うんだよ。

今さら言うまでもないけど、見通しの悪い道路の端に花束が置いてあったら、そこは交通事故、それも死亡事故が起こった現場だということだろう。親父はそのことと、突然あらわれ、またどこへとも知れず消えていった人影を結びつけて考えているのだろう、車の前に飛び出てきたのは、そう遠くない過去にここで非業の死を遂げた誰かの霊だったんだと考えているのだろうということは想像に難くなかった。そんなばかな、とは僕も思った。だけど、道路の片側はガードレールがついてるとはいえ、崖になっている。隠れるようなところはどこにもない。無理に外側に出たら、落っこちて、大ケガをするのがオチだ。ちなみに、花束が置いてあったのも、そっち側だった。逆の方は切り立った斜面で、目の前にコンクリートの壁が立ちはだかっているような格好だった。一応、上の方は土になっていて樹も生えているが、そこまでは3メートル以上はありそうだった。僕らに気づかれずに、そこを登っていったとは思えない。もちろん、花束を見に行ったときに見たけど、崖の斜面にへばりついている人もいなかった。

車の前のところを見てみたが、何かにぶつかったような跡はなかった。だから、実体のある人にぶつかったわけではないことは確実だ。

周りを調べてみたけど、結局、何も分からないまま、二人とも車に戻った。人とぶつかりそうになったものの、実際に死体が転がっているわけでもなし、怪我人がいるでもなし、車の前に出てきた人影は、車とぶつかることなく、そのまま消えてしまったと考えるより他ないという結論に達したわけだ。一だけど、実際にそんなことが可能なのだろうか？それが、ずっと心の隅に引っかかっている疑問だ。僕も、まさかそれが幽霊だったとは思わないが...なんとも不思議で気味の悪い話だろう？

「うーん、率直に言って、担がれたんじゃないの？」

倉岡くんがぶっきらぼうに言った。

「担がれた？」

島川くんが不審げに聞き返した。

「ああ、それ、お父さんのいたずらみたいなものじゃないの？」

島川くんは少しカチンときたような表情を一瞬見せたが、落ち着いた声で答えた。

「いや、うちの親父はそういうことをするタイプじゃない。それに、結構、夜も遅くなってきているのに、そんなことをして、無駄に時間をとったとは思えない。」

倉岡くんはちょっとすねたような感じで黙ってしまった。島川くんは意図的に彼から目を逸らしているようだ。

「車から降りて外を探したのは、君とお父さんだけだったのかい？お母さんと弟さんはずっと車の中だったの？」

僕はちょっと訊いてみた。特に深い意味はないが、ちょっと陰悪なムードになりそうだったので、何か別の質問を試みようと思ったのだ。

「うん。車に戻ったとき、弟はおでこを押さえていた。助手席の背もたれにぶつけちゃったからね。かなり痛そうだった。車に戻ったときに、二人に窓の外に人影はなかったか訊いてみたが、親父と僕以外には誰も見かけなかったと言ってたな。...何か、考えがあるのかい？」

いや、特に考えがあるわけじゃないんだけど...と口籠もってしまったが、ふとある仮説を思いついた。

「下、だよ。」

僕は思わず声を張っていた。これは結構、いけるんじゃないか。

みんな、きょとんとしている。意外だろうが、これが真相だという自信があった。ちょっともったいぶりながら、僕は続きを話した。

「車の下だよ、車の下。謎の人物はぶつかりそうになったとき、地面に倒れ込んで、車の下にもぐった格好になった。そのまま、車が走り去るまでそのまま隠れていた。もしくは、君とお父さんの死角に入るように、車そのものを盾にしながら回り込んで、逃げ出したんだ。」

「車の下に、人が隠られるほどのスペースがあるかな？猫がいるのを見かけたことはあるけどねえ。」

倉岡くんが嫌みっちらしく言った。

「うーん、結局、誰も見当たらずで、再度、車が走り出した後、僕はしばらく後ろを見ていたんだが、人影はなかったんだ。それから、車の影に隠れて回り込む、というのは無理だと思う。二人がどっちを見るか分からないから、どこに隠れてどっちに逃げるかの判断が相当、難しいと思うんだ。」

言われてみればその通りだが、僕も引っ込みがつかなくなった。

「かなり長い距離を、車体の底面にしがみついていた、というのはどうだ？」

「ええっと、君はこう言いたいわけか？謎の人物の正体はスパイダーマンだった、と。」
そこまで言われると、さすがにぐうの音も出ない。

「いっそ、そこには元々誰もいなかった、というのはどうだ？」と倉岡くん。

「どういうことだよ？」

「実は、人が歩いていたのではなく、ホログラム映像だったのだよ。」

「そんなこと、実際にできるのかい？」とあきれ顔の島川くん。

「試作品の実験をしていたというのはどうだろう？」

「もしそうなら、通行規制をすとかして、安全を確保してからやるだろうな…。というか、そもそも、実験室とかじゃなくて、路上でそんな実験をする理由は何だい？」

「まあ、これが正解だとは思ってないさ。こうして検証してみることで、その人物が確かにそのとき、その場所にいたことがはっきりしたじゃないか。」

屁理屈である。さすがに、島川くんがイラッとした表情を見せたので、僕は話題を変えようと思って、言ってみた。

「そもそも、その人はなぜ夜遅く、そんなところを歩いてたんだらうな。」

すると、黒神くんが、

「どうやって姿をくらましたかはともかく、何のために夜遅くそこにいたかは、大方、見当がつくだろう。」

その他の全員が、えっ？という顔をして、一斉に黒神くんを見た。

「なんだ、不思議そうな顔をするなよ。さっき、島川くんが、きれいな花が置いてあったと言ったじゃないか。このクソ暑いのに、路上に置かれた花束がそんなに長持ちするとは思えない。おそらく、その人物は、花束を置きに来たんだらう。そして、帰ろうとして、自動車に轢かれかけた。」

「だったら、昼間に来たらいいじゃないか。なんでそんな時間に…。」

「人目を避けたい理由があったんだらう。おそらく、その人は交通事故死の犯人、というか、加害者ではないかと思う。罪悪感から、被害者の供養のために花束を持っていきかけたが、捕まりたくはないから、人目を避けて夜中に行ったんだ。絶対にそうだとは言い切れないだろうが、無理のない解釈ではあるだろう。」

なるほどね、と島川くん。

「じゃあ、どうやって姿を消したんだらう。まさか、車に撥ね飛ばされて、崖の下に落ちたとか言うんじゃないだらうね。」

「この話のキモはそこじゃないと思う。どうやって姿を消したかではなく、どうやってそこに来たか、だらう。そこから考えていくと、真相らしきものが見えてくるんじゃないかと思う。」

「どういうことだ？」

「ん？道路の状況を聞くかぎり、その人物は徒歩で来たとは考えにくいように思える。もし、車かバイクなんかで来たんなら、すぐ近くにそれらを置いて、花束を置きにいったはずだらう。だけど、島川くんの話では、近くに車とかは見当たらなかったんじゃないかと思うんだ。」

「そうだ。そこは考えてなかったけど、無人のバイクとか自動車が置いてあれば、気づかないはずはないよ。」

黒神くんは、そうか、と言った。

「やっぱりな。停まっている車かバイクを見たら、印象に残るだらうから、話に出てくるだろうと思っていた。けどなかったということは、カーブをさらに回り込んだ先とか、君たち家族の乗っていた車から見えないところに車かバイクが停めてあって、それで走り去ったか、どっち

かだろう。だけど、どう考えても、夜の山道を、花束を手を持って歩いてきたと考えるのは、少々、無理があるだろうな。事故当時は、車かバイクに乗ってきたんだろうし、今回も、そういうたぐいのものに乗ってきたと考えるのが妥当だろう。ま、俺はバイクだろうと思うけどな。その方が目立たないし、機動力がある。」

「おい、ちょっと待てよ。」と倉岡くんが声をあげた。

「その道路を歩くのが不自然だというのなら、そもそも最初の事故はどうやって起きたんだよ？」

「最初の事故？」

「そう。謎の人物が加害者となったと想定している事故のことだよ。その道を歩いている人をはねたというのなら、やはり不自然だろ。」

「被害者が歩いていたとはかぎらない。バイクと車の事故とかかもしれない。俺は勝手に、カーブを曲がる時にスピードが出過ぎていてふくらんでしまった対向車同士がぶつかったんじゃないかと思ってるがね。外側の崖に近いところに花束を置いたのは、そのあたりでぶつかったからだろうと推測しているんだ。」

ふうん、と言ったきり、倉岡くんは黙ってしまった。よしよし、ぐうの音も出ないというやつだね。さっきの僕と一緒にだね。

「さて、話を本筋に戻そう。謎の人物は、バイクか車でやって来た。彼、あるいは彼女の心理としては、目的の場所のすぐ近くにそれを置いておくのは抵抗があっただろう。少し離れたところに、それを停めておいた。花束を置いた後、彼、あるいは彼女の立場としては、自分が乗ってきた乗り物のところに大急ぎで戻ったんだろうな。ゆっくり、安全を確かめてから道路を渡っていれば、車に轢かれそうになることもなかったらうけど。」

「そうだ、それからその人はどうした？どうやって、姿を消した？」

「いや、どうもしないだろうよ。そのまま、乗り物のあるところまで走って、それに乗って逃げただけさ。」

これには一同、ぽかんと口を開けたままだ。一瞬の間があって、島川くんが問いかけた。

「なんだって？どういうことだよ？どこかに隠れたとかじゃなくてか？」

幾分、怒気を含んだような口調になったのも分かる気がする。

「そういうことだ。もう少し詳しく言うなら、角度の問題だ。君はおそらく、前を横切ったという言葉聞いて、人と車がほぼ直角に交わるイメージを持っただろうが、実際のところはずっと浅い角度で交わっていたはずだ。つまり、実際には君たちが乗っていた車から見て、その人物が斜め前に逃げていく感じだな。」

「その人物は人に見られたくない。花を置いた後、大急ぎで乗ってきたもののところに戻った。とすればだ、おそらくはほぼ一直線にそこに向かった。おそらくは全力疾走で。道は大きなカーブになっていて、それは、君たちから見えない位置に置かれていた。お父さんは急ブレーキが間にあう程度には手前で、ブレーキを踏んだ。車はそのまま直進してから停まった。つまり、向きとしては、かなりカーブの外側に向いた状態で停車した。逆に、その人物はカーブの内側に回

り込むように移動していた。おそらく、降りた直後の位置からは、君たちが乗っていたというワンボックスカーが視界を遮っていた感じだったんじゃないかな。そして、君のお父さんは、車を降りた後、辺りを見回して、路傍の花束に気がついた。夜目にも白い菊の花だ。車の後ろを向く感じで、相手から遠ざかる方向に動く形になった。いわば、自らすすんで、そのワンボックスカーの死角になるように動いてやったようなもんだ。君は車を降りて、ちょっと周りを見て、すぐにお父さんに気がついた。だから、同じように、逃げる相手を死角に入れてやるよう動いた。二人が話をしている頃には、すでに乗ってきたものに乗って、かなり遠くまで走り去っていたんだらう。」

何か言いたそうな顔の島川くんに、黒神くんが言った。

「しょせん、世の中こんなもんだ。」

第三話 開けてはいけない襖

じゃあ、トリはお前だ、と倉岡くんにならまれた。島川くんも期待に満ちた眼でこっちを見ている。唯一、黒神くんがまたかよ、とでも言いたそうな表情で見ているのが救いだ。その表情に後押しされるように、僕は思い切って、言ってみた。

「そろそろ帰ろうよ。黒神くんに悪いし...。」

そして、助けてくれ、という思いを込めて、黒神くんの方をチラ見した。...のだが。

「いや、遠慮はいらんよ。まだ雨も降ってるし、泊まってもかまわないぜ。」

え？それは冷たいだろ、黒神くん。君だけが頼りだと思ったのに...。仕方ない。僕が体験した、いくらか怪談めいた話といえば、一つだけしか思いつかない。ただ、この話はなぜか思い出したくないのだ。怖いから、というだけではない、何かを感じるのだ。それが何かと言われると、自分でもうまく説明できないのだが...

とはいえ、メンバーからせつつかれて、仕方なく僕は語り始めた。

「うちが母子家庭だったということは、みんな知ってるよね？（無言のうなずき）これから話すのは、僕が小学校四年生の時のことだ。」

「僕は風邪をひいたんだ。確か、水曜日の夕方ぐらいから症状が出始めて、夜に近所の医者に連れていってもらって、三日分の薬をもらって帰ってきた。翌朝、熱を測ったら、七度二分だった。で、学校を休むことになって、母が電話してくれたんだ。...でも、その電話で母が、四十度以上も熱がある、と相当、深刻そうに言ってて、なんだかざる休みするような気分だったことを憶えている。」

「一応、朝ご飯を食べた後、風邪薬を飲んだ。おかゆをつくって置いてあるから、お昼はそれを食べるように、それから、何かあったらすぐに電話するようにと強く言って、母はいつものように仕事に出かけた。僕は、正直、普通のご飯とおかずの方がよかったけどな...。それはさておき、僕はテレビを見ていたが、その時間帯は子ども向きの番組はやってないし、退屈して、すぐに切ってしまった。体もだるいし、横になったら、少しして眠ってしまった。風邪薬の効果もあったのかもしれない。それで、目が醒めたら、昼過ぎだった。台所に行ったら、母の言葉どおり、おかゆと二回分の風邪薬が置いてあった。なかば糊みたいになった、かなり柔らかいおかゆを食べて、風邪薬を飲んでまた横になった。そのまま、すぐにうとうとし始めた。」

大して面白くもない話を、皆、神妙な顔をして聞いている。なんだか妙な気分だ。

「でも、押入の中でゴトツ、と音がして、僕は目が醒めたんだ。」

押入？と聞き返したのは、島川くんだ。

「そう、押入。その頃、僕と母は、六畳一間に台所とも呼べないような狭い台所とトイレだけのアパートに住んでいたんだ。風呂は近所の銭湯に行っていた。僕が寝ていたのはその六畳間で

、そこには押入があった。」

ふうん、と島川くんは納得したようだ。

「押入の中は上下二段になっていて、上段に布団類、下段に衣類の入った衣装ケースが三つと、おもちゃ箱があったくらいだった。そんな、ゴトツとかいう音のするようなものは何もなかったんだ。」

「その、おもちゃ箱に入っていたものが、何か、崩れたとかしたんじゃない？」と倉岡くん。

「いや、そこに入ってたのは、人形とかそんなものだったし、そういう音ではなかったと思うけどな。そうだ、動かすたびに鈴の音がしてたから、絶対に違うよ。断言できる。で、...そうだな、感じとしては、奥の壁に何か、固いものがぶつかったような、にぶい音だった。それに、押入の上段あたりから聞こえたように思う。」

そう言っても、倉岡くんはまだ疑わしそうな顔つきだったが、僕はかまわず続きを話した。

「僕は驚いて、しばらく、押入のふすまをじっと見つめていた。そしたら、今度はうめき声のようなものがかすかに聞こえたんだ。」

気味悪いな、と倉岡くん。島川くんは、押入の中に誰かいたんだろう、とある意味、至極当然の反応を示してくれた。だが、僕は力説する。

「中に、って誰が？いつの間に？何の目的で？まだこれから話すところだったけど、母が帰ってきたとき、僕が中から鍵を開けた。つまり、確かに鍵をかけて出かけたってことさ。母が出かけた後に、忍び込んだとは思えない。さっき言ったとおり、狭いアパートの中で、その前から何者かが侵入して、僕と母に気づかれることなく、隠れ通していたとは思えない。事実、その日の朝、母は自分の布団を畳んで、押入に入れたんだ。それから、僕の子ども用の布団を端に寄せて、小さなコタツを出したんだ。」

「こたつにもぐって寝てれば、食事の時とかめんどくさくなくて、よかったのに。」と倉岡くん。いや、そこはどうでもいいだろう。

「コタツは、君の布団と押入の間にあったのかい？」と島川くんが尋ねたので、黙ってうなずいた。

「じゃあ、コタツの上に置いてあったものが、何か、まぎらわしい音をたてたんじゃないの？」

「いや、コタツの上には、お茶の入ったヤカンがあっただけだったと思う。食べた後の食器は、流しに持って行って、水につけておいたからね。それに、物音にせよ、うめき声にせよ、確かに、押入の中から聞こえたんだ。」

「一応、確認しておくが、それで、君は押入を開けてみなかったんだな？」と島川くん。僕はうなずく。

「当然、押入のふすまを開けて、中を確認してみたい衝動には駆られた。だけど、開けてはいけないと思って、開けなかった。かわりに、誰かいるの？と尋ねてみたけど、返事はなかった。物音も、うめき声も返ってこなかった。」

倉岡くんが言った。

「天井裏から侵入したんだ。そのゴトツという音は、天井板をはずして置いたときの音だ。うめき声はその穴を通るのがきつかったんだろう。」

やれやれ、そんなアホな。

「で、賊は、押入に入って何をしてたんだい？そこでじっとしてただけか。何のために？それで、帰るときはまったく無音だった、とこう言いたいのかい？」

「泥棒するつもりで来たが、人がいるのに気づいて、何もせず、ばれないようにそっと引き返したのさ。」

「音は下段あたりから聞こえたように思ったが、な。それに、天井裏に上がるのは、降りてくるより腕力があるだろう。降りるときに物音がして、上がるときにしないというのは納得しかねるね。まだあるよ。天井裏から侵入を企てたのなら、いきなり押入から侵入するのはリスクが高い。まず、居間の上から様子を探るべきだと思うけど。それに、その前後で、他の部屋や近隣で泥棒に入られたという被害がありそうなものだが、そういう話は聞いたことがない。」

でも、とか何とか言い募る倉岡くんは、僕は厳しく、却下！と一言言い放った。

「隣の部屋の人だったということはないのかい？」

ふいに、倉岡くんが言った。

「いや、隣の部屋はないんだよ。」

僕の答えに、全員、キョトンとした。無理もないか…。ちゃんと説明しなければ…。

「うちは、アパートの端の部屋だったんだ。しかも、二階建ての二階だった。だから、押し入れの奥の壁の向こう側にあったのは、何もない空間だけだったんだよ。」

「廊下とかもなかったのか？」

「なかった。何というか、各部屋の入り口が並んでいる前に廊下があって、その両端に金属の、歩いたらカンカンいう階段がついてる形だったんだ。」

「あー、わかる、それ。」と倉岡くん。「典型的な安アパートのスタイルだよな。」

こら。安アパートは失礼だろう。ま、その通りだったんだけど。

「階段の途中に立っている人が物音を立てたり、何か声を出したりしたんじゃないのか？」と島川くん。

「だったら、もっと低いところで音がするだろう。はっきりと、押入の上段あたりから聞こえたんだから。」

「距離感から考えても、室外に音源があったとは考えにくいな。」と島川くん。ぐるりと、頭をめぐらせて、黒神くんの顔を見て、君なら、この真相が分かりそうだと思うんだけど、と言った。

「いや、さっぱり分からん。こいつばかりはお手上げだ。」

黒神くんはそう言ったが、同時に、不自然に目をそらしたように、僕には思えた。本当に分からないのか、何か思うところがあってごまかしているのか、突っ込んで訊いてみようと思ったのだが、

「お！もう、雨も上がってるぜい！」と、倉岡くんの素っ頓狂な声が響いた。島岡くんも窓の

外を見て、あ、ホントだ、とか言っている。

結局、夜遅くまで悪かったね、とか言いながら、僕たちは黒神くんの部屋を出て、それぞれの家（というか、下宿先だけど）に帰っていった。とうとう、僕の疑問は切り出せないままだった。

エピローグ

僕はどうしても、あのときの黒神くんの態度が気になっていた。それで、翌日、ランチに彼を誘った。彼は乗り気ではなさそうだったが、一応オーケーしてくれた。

大学の近くの喫茶店で気まずい昼食をとった。食後の珈琲をすすりながら、意を決して、僕は切り出した。

「あのさ、昨日の夜、最後に僕がした話だけどさ、島川くんが君に意見を求めたら、分からないと言ったよね。」

「ああ、確かにそう言った。」

「でも、そのとき、目をそらしたよね？」

「そうだったかな？」

「とぼけても無駄だ。僕はちゃんと見てたんだ。僕も、誰かが謎を解いてくれるなら、君しか以内と思って、期待していたんだ。あのことは、僕にとっては、思い出したくない記憶なんだ。なぜ思い出したくないのかもよく分からない。それでも思い出すことがある。そのたびに、何かすごくもやもやとした気分になる。怖いという気持だけじゃないんだ。胸が苦しいような、なんとも言いようのない、不快感があるんだ。だけど、君が倉岡くんと島川くんの話を聞いて、見事に謎を解いたのを見て、ひょっとしたら、僕を苦しめてきたこの記憶についても、解決してくれるかもしれないと期待して、辛いのをこらえて、話したんだ。だから、分かったことがあるなら、何でもいいから、話してほしいんだよ！」

いささか語気が鋭くなってしまったが、どうしても、あの奇妙な現象に対する、合理的な解決を得たいという気持からだ。少なくともその気持は、黒神くんにも伝わったはずだ。黒神くんは困ったような顔をしていたが、静かな声でこう言った。

「やれやれ、本気で憶えてないようだな。」

「何を？」

「やっぱりな…。仕方ない、話をしよう。だが、その前に言っておくべきことがある。」

そう言って、黒神くんは珈琲を一口すすった。

「人は、あまりに辛い記憶はわざと忘れることがある…というより、無意識下に押し込めて、出さないようにすると言った方が正確かもしれないが。僕はある理由で、君がこの状態になっているのだと判断した。もちろん、その『ある理由』についても、話すけど…もし、僕が話す課程で君が、忘れていたことを思い出したら、そう言ってほしい。その時点で、俺は話をやめる。いいな？」

僕がうなずくと、黒神くんが語り始めた。

「まず、昨日、君が話した状況から考えて、音なり声なりは、押入の中で発せられたと考えるより他にないだろう。その点は、昨日、島川くんたちが検討したとおりだ。それとは別に、君の

話の中で、いささか奇異に思われたことがいくつかあった。まずは、君のお母さんの態度だ。もう、小学校四年生になってたんだらう？三十七度二分くらいの熱で、心配しすぎじゃないか？もちろん、人によって違うけど、俺の親なら、熱冷ましを飲んで、とっとと学校に行け！と言ってただらうな。それだけじゃない。昼食べるおかゆは作って、置いていってくれたんだらう。晩飯の用意はなぜしてない？」

僕は虚を衝かれた感じがして、黙って、黒神くんの顔を見た。

「もちろん、仕事から帰ってきてから用意するつもりだったんだらう。だったら、なぜ、風邪薬は二回分、出してあった？昼飯のあとの一回分だけでいいじゃないか。むしろ、君が昼飯食った後、うっかり薬を二回分、まとめて飲んだりしたら、どうなるかわからない。」

「それから、君のおもちゃ箱だ。動かすたびに鈴の音がした、と言ってたが、鈴の音がしたのは、何のおもちゃだ？憶えてるか？」

そう言われてみると、変な気もする。四年生ぐらいのときに気に入ってたのは、ミニカーとかだ。鈴の音がするようなものが何かあったか、思い出そうとしたが無理だった。思い出そうとすると、何か、独特の不快さが込み上げてきた。

「とどめは、君が押入を開けなかった理由だ。何と言ったか、憶えてるか？開けたらいけないと思ったからだ。怖いから、とか、おばけがいたらどうしよう、とかじゃなく、だ。」

黒神くんはここで一息ついた。

「どうだ、思い出したか？」僕はあわてて、首を振った。

「なら仕方がない。言ってやろう。これらのことから考えられるのは、君よりもはるかに小さい子どもの存在だ。」

子ども？いや、僕のところは母子家庭で、ずっと、母と僕、二人きりで暮らしてきたはずだ。

「そう考えれば、すべて、つじつまが合う。君の小さな弟だか、妹だかは君と同じ時に風邪をひいて、高熱が出ていた。四十度以上もあったから、学校に休みの連絡をした。年齢によっては、学校ではなく、保育園とかだったかもしれないがね。そして、その弟か妹に何かあったらすぐに電話するように、君に頼んだ。おそらくはそのとき、その子が寝てるから、むやみに押入を開けないように注意したんだと思う。君の方は、風邪と言っても症状が軽かった。小四の男の子のことだ、ちょっと熱が下がって元気になったら、遊び回るかもしれない。俺も覚えがあるが、その年格好なら、ごっこ遊びとか好きだったんじゃないか？プロレスごっこ、怪獣ごっこ...平たく言えば、取っ組み合いだ。そうでなくても、家の中を走り回ったりして、誤ってぶつかるようなこともあるかもしれない。だから、まだ小さい下の子は、押入の中にある布団の上に寝かせてあった。だが、四年生の君は文字通り、ふすまを開けてはいけない、と受け取ったのだらう。」

え？まさか...いや、しかし...

「食事や薬にしても、そうだ。君自身はなかなかの美食家だから、おかゆが柔らかすぎたのが不満だったようだが、君の弟か妹かは、普通のご飯や固めのおかゆでは、食べにくかったんだらうね。高熱のせいもあったんだらう、あまり食欲がなかったようだね。もちろん、風邪薬は二回分、置いてあったんじゃない。二人分、あったんだ。衣装ケースは一人に一つずつあったんだ

。おもちゃ箱の鈴の音は、ガラガラか、それに類するおもちゃの音だろう。だから、君は、それが何のおもちゃだったか、憶えていない。その記憶は抑圧されてしまったんだ。...どうした、顔色が悪いぜ。」

そりゃそうだろう、僕は全て思い出した。僕が妹を死なせた日のことを。

一その日、僕は不満だった。ちょっとしんどいけど、学校に行けないほどではなかった。いや、僕の好きだった、図工の時間があったので、むしろどうしても行きたかった。でも、小さな妹の面倒を見るように言いつけられて、ちょっとむくれていたのは確かだ。とはいえ、できるかぎりのことは、ちゃんとしたつもりだ。

母からは、お昼になったら、おかゆを食べて薬を飲むように言った。ちゃんと、絵里子ちゃんにも食べさせて、お薬飲ませてね、と言っていた。僕はその通りにした。年齢の割にはしっかりした子どもだったと思う。

母は、妹を押し入れの下段に寝かせるために、衣装ケースなどを端に寄せて、小さな布団を反対側に敷いてあったのだが、僕はふと思いついて、二段に積んであったのを横に並べて、その上に布団を敷いた。布団を並べて寝ていた僕にとって、当時、二段ベッドが憧れだった。ベッドをつくってやったつもりだったのだ。

そこから、妹が転がり落ちた。高さは低かったが、頭から落ち、体が反対側に倒れこむような形になったため、首が折れ曲がるような体勢になった。ゴトツというのは、そのときの音だったのだ。もちろん、そんなことがあれば、妹は火がついたように泣いたはずだ。だが、うめき声のようなものを漏らしただけだった。だから、当時の僕は大きく痛くなかったのだろうと思ってしまった。それで、母に電話しなかったのだ。しかし、今はその意味がはっきり分かる。それは、つまり....

気がつくのと、黒神くんが僕の名前を呼んでいた。ぼんやりと、僕は、彼の顔を見た。

「大丈夫か？やっぱり、話さなきゃよかった。刺激が強すぎたんだ。」

「いや、話してくれてよかった。ありがとう。」

僕はそう言った。母は、僕を責めなかった。形ばかりの小さなお葬式が済んだ後、早々に、母は妹がいた痕跡をぬぐい去るように、いろいろなものを捨て去り、妹のことを口にしなくなった。不幸な事故を僕が速く忘れられるようにという配慮だったのだろう。しかし、母も苦しかったはずだ。

今、一応、年齢だけは大人になって、僕ももう、この記憶としっかり向き合って生きなくてはならないのだろう。黒神くんには、本当に感謝している。だが、僕の心のどこか片隅には、彼を恨む気持が巣くってもいる。この気持も、抱きしめてなだめてやりながら生きなくてはならないのだろう。

あとがき

今回は推理ものにチャレンジしてみましたが、正直かなり難しかったです。推理といえるほどの内容にはできなかったけど、創作を続ける上で、勉強にはなったと思います。

拙い作品を読んでもくださった方々、本当にありがとうございます。